

# 石瀬貝塚

常滑市教育委員会

愛知県常滑市

# 石 瀬 貝 塚

新 海 公 夫  
久 永 春 男  
井 関 弘 太 郎  
杉 崎 章

1962

常滑市教育委員会

## 序

常滑市は、昭和29年4月1日 三和、大野、鬼崎、常滑、西浦の5ヶ町村（昭和32年3月31日小鈴谷の一部を合併）が合併して誕生した 人口52000の窯業を主とした市である。

市内、三和地区内聚落の一つ、通称「石瀬」の北麓に竹林に囲まれた畑地がある。この一角に市立母子寮の建築工事が着工されたことからはしなくも発見されたこの貝塚は、常滑市立青海中学校（当時の三和中学校）教諭新海公夫氏に発掘調査を委嘱して昭和33年5月4日試掘のトレンチがうがたれ、同年7月30日に現地での調査を終了し、ここにその結果をまとめ上梓することになった次第である。

知多地方には古窯址がその丘陵地帯には幾千と存在し知多古窯址群と称されているが、常滑地域はその枢要なる位置にあり、これらについては当市古窯調査会及び愛知県・文部省等によつて調査され刊行物としても世に問われてきた。これらの古窯は平安・鎌倉期のものであるが、この貝塚のように縄文期のものは当市としては最初である。

本書よによつて、当地に在住した古代人の生活の一端がうかがわれると共に、夙に発掘調査された知多の各地の貝塚・遺跡と関連照合する時この地方に在住した古代人の生活史の概要をキャッチすることができるであろう。この意味においても本調査は頗る意義があると思う。

発掘調査に当り、地主の水野よね・都築房次郎両氏のご理解あるご協力と共に、学術担当者の日本考古学協会員久永春男氏を始めとして、この道の先輩諸賢からの絶大なるご指導ご協力に対し、こゝに衷心よりお礼を申し上げますと同時に今後のご指導をお願いする次第である。

昭和37年3月15日

常滑市教育委員会

教育長 都 築 玄 介

## 例 言

1. 本書は昭和33年7月に発掘調査を実施した愛知県常滑市金山字屋敷にある石瀬貝塚の報告書である。
2. 本報告書の刊行の時期が遅延したのは、調査の主体となった三和中学校が、その直後（昭和33年9月）に青海中学校として統合移転したのをはじめ、この地方を襲った伊勢湾台風による被災等により余儀なくされたわけである。報告書の刊行とは別に、郷土クラブ諸君の活動記録をまとめた文集を用意したのであるが、以上の理由のために報告がおくれて今日にいたっている。本書の刊行を機にその促進を期したい。
3. 本書を刊行するにあたり、発掘調査を委嘱した青海中学校教諭の新海公夫氏はもとより、調査の学術担当者として御指導いただいた日本考古学協会員久永春男氏、先史地理的考察のため現地踏査をねがった名古屋大学地理学教室の井関弘太郎助教授、ならびに終始協力と援助を惜まれなかつた常滑市立西浦南小学校教頭の杉崎章氏（調査当時・横須賀中学校在勤）をはじめ芳賀陽氏・加藤岩蔵氏・磯部幸男氏・谷沢靖氏・田中稔氏に対し厚く感謝の意を表したい。  
また地主の都築房次郎・水野よねの両氏には、心よく調査を了承していただいた御理解を深く謝するものである。
4. 本書の執筆分担は次の通りである。

第一章～第四章	新海公夫
第五章	久永春男
第六章	井関弘太郎・杉崎 章

それぞれ御執筆を快諾され研究成果の提供をいただいたものである。
5. 本書の表紙題字は常滑市長久田慶三氏の揮毫をいただいた。厚く感謝したい。

# 愛知県常滑市石瀬貝塚

序 文

常滑市教育委員会教育長 都築玄介

## 本 文 目 次

第一章 石瀬貝塚の位置 .....	1
第二章 調査の経過 .....	2
第三章 遺 跡 .....	6
第四章 遺 物 .....	10
(1) 自然遺物	
(2) 人 骨	
(3) 人工遺物	
第五章 石瀬貝塚出土の縄文式土器の相対年代 .....	24
第六章 石瀬貝塚を主とした大野谷の先史地理的考察 .....	29
(1) 海進期以前における原地形	
(2) 海進期における大野谷地形	
(3) 石瀬貝塚の生活環境	
(4) 海退期における大野谷の地形変化	

## 図 版 目 次

- 一 遺跡の遠望と近景ならびに発掘区状況
- 二 土器出土状況
- 三 人骨の埋葬状態と石鏃
- 四 第一群土器
- 五 全 上
- 六 第二群土器
- 七 全 上
- 八 第三群土器
- 九 全 上
- 十 全 上
- 十一 全 上
- 十二 全 上
- 十三 全 上
- 十四 全 上

## 付 表 目 次

- 第1 貝類の組成比率表 ..... 10
- 第2 自然遺物表 ..... 11
- 第3 石器のトレンチ別出土表 ..... 13
- 第4 採集土器片層位別数量表 ..... 14

## 挿 図 目 次

第一	大野谷の貝塚と古墳	
第二	石瀬貝塚附近の地籍図 .....	1
第三	第1トレンチ .....	4
第四	石瀬貝塚の発掘区と地形 .....	7
第五	発掘区の断面の実測図 .....	8
第六	第3トレンチ西側断面 .....	9
第七	人骨とその埋葬穴 .....	12
第八	石鏃実測図 .....	13
第九	第一群土器の拓影 .....	17
第十	第二群土器の拓影 .....	18
第十一	全 上 .....	19
第十二	第三群土器の拓影 .....	20
第十三	全 上 .....	21
第十四	全 上 .....	22
第十五	全 上 .....	23
第十六	愛知県新城市有海・上の平遺跡出土土器	
第十七	愛知県新城市有海・篠原遺跡出土土器の拓影 ...	27
第十八	大野谷沖合の伊勢湾等深線図 .....	29
第十九	大野谷の地形図 .....	30
第二十	試錐地点地質柱状図 .....	31
第二十一	試錐地点E附近の地表下層序の模式図 .....	31



挿図第一  
大野谷の貝塚と古墳  
(縮尺二万五千分の一)

- 1. 石瀬貝塚
- 2. 森西貝塚
- 3. 東畑貝塚
- 4. 寺山古墳

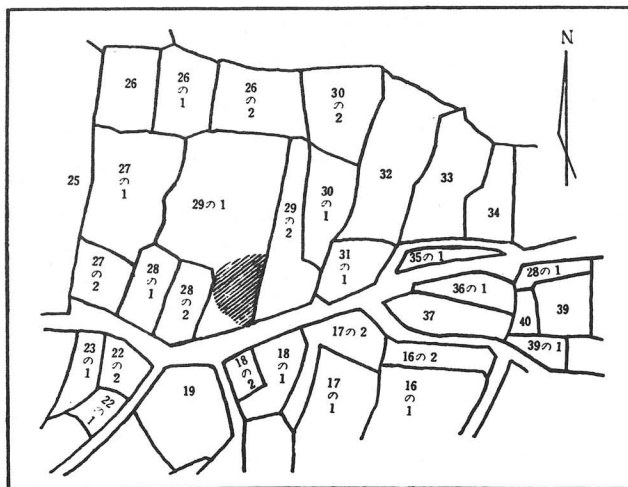


# 第一章 石瀬貝塚の位置

名古屋鉄道常滑線尾張大野駅に下車して、大野川の南岸に沿う大野一半田街道を遡ること約1.5km、周囲は一面の水田地帯となる。この水田地帯の南寄り地帯を西に流れる前山川の堤と、街道とが接する地点で、川の堤に登って南方を眺めると、すぐ眼前にこんもりした台地上の森があり、その北端の東傾斜の一角に赤瓦・白壁の建築物がある。この赤瓦・白壁の建物が常滑市立母子寮である。

石瀬貝塚は、前山川の堤から田圃道へ抜け、母子寮前の緩い登り坂を行くこと約100m、坂を登りきったところの北側で約200平方mの梅林と、その北に隣接する畑地にかけてひろがっている。地籍は常滑市金山字屋敷敷29番地の1に属し、水野よね氏（梅林）都築房次郎氏（畑）の所有地である。

貝塚の標高は約10m、ここから東北を眺望すると、狭い水田を隔てて前山川の堤が横ぎり、その北は一面の水田地帯で、その中に前山川とはほぼ併行して、久米川、次いで矢田川が西流している。この水田地帯が古くから大野谷と呼ばれ、それを囲んで北側に粕谷・矢田、東側に久米、南側に前山・石瀬の各聚落が存在している。



挿図第二 石瀬貝塚附近の地籍図  
常滑市金山字屋敷敷地内（斜線は貝塚の位置をあらわす）

## 第二章 調査の経過

昭和31年2月、常滑市が母子寮建設のため、常滑市金山字屋敷（通称「石瀬」）地内に工事をはじめたおり、当時常滑市立三和中学校（現・常滑市立青海中学校）の第2学年に在学していた桑山雅徳・水野隆二の両君が、その現場附近から採集した数片の土器片と貝殻とを学校に届けて来た。この土器片によつて、縄文式土器文化期の遺跡が所在することが判明した。

翌日、現地を訪ねて見ると、緩く東に向つて下る傾斜面を地均して母子寮建築が進捗していたが、その地均ししたあたりには白々と貝殻類が散乱し、土器片も混っているのが見出された。

採土を行つた崖の南から北への切断面には、耕土層下30～40cmの深さに黒褐色混土貝層があらわにあらわれていて、そこから数片の土器片が見出された。この踏査によつて、縄文式土器を包含する貝塚の存在を確認し、また採土作業に従事した人々の談話から、貝層の切り取られた部分は極めて僅少な巾であつて、主要部分は現存すると推定されたのであるが、これは常滑市内では初めての縄文遺跡の発見であつた。

その後、母子寮建築工事の進行をみはからつて、しばしば現地を訪れ、遺跡の範囲の調査や散乱土器片の蒐集を行ない、その結果を常滑市教育委員会に報告した。

ついで、昭和32年10月に、奈良県文化財保存課主事小島俊次氏の来訪をうけ、知多半島においては、特に伊勢湾沿岸では縄文遺跡の発見例がまだ少ないこと、伊勢湾をめぐる原始社会文化の探究に資することの大であることを指摘され、調査の指針を示された。その後、日本考古学協会員久永春男氏が現地を訪ね、出土土器が一型式でないことを指摘され調査についてのいろいろな御指導をいただいたのであつた。

遺跡発見から約2ヶ年を経過して、地主の水野よね・都築房次郎両氏の御好意と常滑市教育委員会の特別の御配慮により、三和中学校社会科郷土史クラブ（註1）が主力となつて発掘調査を実施する計画をもち、昭和33年3月3日、常滑市教育委員会から文化財保護委員会へ久永春男氏を発掘担当者とする発掘届を提出し、昭和33年3月24日付地文記第228号の承認書を得て調査の運びとなつた。

### 昭和33年5月4日（晴）

貝塚の主要部分が、水野よね氏所有の梅林となつているので、その東端の崖面に見える貝層と平行して梅林の中央に南北のトレンチを試掘することとした。5月の微風は気もちよく作業をはかどらせてくれたが、梅の木から梅毛虫が落ちてくるのにはいささか閉口した。試掘のねらいは貝塚の範囲を調べること、貝層の層序を検討し、すでに採集された遺物の中に2時期があるもようなので、それを確かめることにあつた。

トレンチの表土および表土下有機土層からは殆んど遺物は出土せず、その下層のアサリの多い黒褐色混土完存貝層から、縄文と半割竹管文・三角形の彫刻文などを加えた土器片が2～3片出土した。

貝層上面には火に焼けた跡が一面にひろがつていた。焚火をして灰を一面に撒いた感じである。

### 6月18日（雨）

貝塚発掘に経験を重ねている愛知県知多郡横須賀中学校教諭杉崎章氏・愛知県知多郡

八幡中学校教諭芳賀陽氏と試掘の結果について協議し、発掘調査の具体的計画について相談し、試掘トレンチを北方へ延長すること、これと十字形に東西トレンチを掘ること及び各トレンチの担当を次の諸氏に協力を依頼することとした。

- 第1トレンチA・B区 愛知県知多郡八幡中学校教諭 芳賀 陽氏  
第1トレンチC区 愛知県知多郡横須賀中学校教諭 杉崎 章氏  
第2トレンチA区 愛知県知多郡師崎中学校教諭 磯部幸男氏  
第2トレンチB、C区 愛知県刈谷市刈谷東中学校教諭 加藤岩蔵氏

#### 7月25日(晴)

郷土史クラブ員24名を動員して、発掘予定地域の耕土層を貝層面まで掘り起す作業を午前中に行い、午後は明日からの調査に必要な器材・器具等の整備をする。

#### 7月26日(曇時々雨)

前日に、計画した各トレンチの表土をはねる作業をしておいたので、今朝は直ちに貝層に調査の竹べらをいれる事ができた。

発掘の担当を委嘱した久永春男氏をはじめ各調査員、三和中学校では佐野孝男校長・吉川久夫教頭ほか数人の職員が作業に加った。

むし暑く、固くしまった貝層を移植小手ではがしていく作業は苦しかった。その上、時おり通り魔のようにザアツと降る雨が作業の進捗を妨げる。

第1トレンチでは表土の厚さ30cm、貝層第1層は黒褐色泥土破碎貝層となっていてその厚さ約10cmで、その下はハイガイの多い黒褐色泥土完存貝層となっており薄い焼土層がおおっている。この貝層中からは貝殻文らしい土器片が1～2個片発見できた程度であった。

第2トレンチA区は地盤が東北に下り傾斜でその上に貝層がかなり厚く積まれていてその第1層は黒褐色泥土破碎貝層であった。この層を掘り進めたが土器等の出土は極めて少量で破碎貝層とその下のアサリの多い黒褐色泥土完存貝層にうつる境になる位置から黒耀石製の石鏃と縄文のある土器片を発見した。

第2トレンチB区は水道線施設工事のために貝層は全く攪乱されており層序を見ることはできない。C区では此のトレンチの西端で貝層は非常に薄いものになっていることを知る。そして貝層もほぼ泥土貝層と純貝層の2層である。泥土貝層の下部から加曾利E式土器に類似した土器片数個を採集した。

午後は雨も本降りとなつたので母子寮の一室を借りて本遺跡の調査について研究討議の会をもつた。なお、此の日朝から静岡県浜松市立博物館の向坂鋼二氏・県立常滑高等学校教諭の中沢三千夫氏の参加もあった。

#### 7月27日(晴)

天候はすっかり回復、朝から真夏の陽光は容赦なく照りつける。トレンチ内は昨日の雨で粘り、有機質の異様な臭気がただよう。朝から常滑市教育委員会の委員長水上義介氏・おなじく教育長都築玄介氏、さらに常滑市議会文化委員杉江達太郎氏・常滑古窯調査会沢田由治の各位が来駕、詳さに発掘調査の状況を視察され、郷土史クラブを激励される。また、名古屋から田中稔・松岡浩・大野実・小沢健治・増子康真の諸氏が来援、発掘現場は洵に活気に満ち、作業は一段と進められた。

第1トレンチB区においては、A区と同様に貝層上部には焼けた形跡がみとめられた。出土土器は極めて少量で、貝層の中央あたりから縄文と半割竹管文と三角形彫刻文を加

えた土器片が検出された。

第1トレンチC区は第2トレンチA区につづくアサリの多い純貝層が部厚くひろがっていたが土器は全く出土せず、単調な発掘が丹念に行われた。

第2トレンチA区は第1トレンチC区に続いて、アサリの多い純貝層がひろがっており、人工遺物はやはり極めて少なく、黒耀石の打製石鏃が1個、土器は貝塚の上層部（黒褐色泥土完存貝層）からは縄文と太い沈線のある土器、中層部（アサリの多い黒褐色泥土完存貝層）・下層部（アサリの多い黒褐色泥土破碎貝層）からは、縄文と竹管文・三角形彫刻文のある土器、半割竹管による爪形文を施した土器、燃糸文と沈線又は隆線に刺突文を施した土器が検出された。

なお、この第2トレンチB区の純貝層において小学校5年に在学する久永直見・新海規男の両君は貝類の組成を調べた。

第1トレンチを北方へ延長して第3トレンチを設定した。これまで第1トレンチA・B区を分担していた芳賀陽氏に発掘を担当していただく。

第1トレンチの担当は愛知県立刈谷高等学校教頭の谷沢靖氏と交替した。



挿図第三 第1トレンチ  
(アサリの多い純貝層の発掘)

第3トレンチの発掘は今朝から始めたが極めて順調に進んだ。第1トレンチ・第2トレンチから出土する土器の量が少ないのに対して、第3トレンチからは非常に多量の土器が出土した。表土層の深部には行基焼の山茶碗小皿を混合し、貝層の上層部（黒褐色泥土貝層）からは、隆線と太い沈線、または太い沈線と篋描文を加えた土器類が多く出土し、貝層の中層部（黒褐色泥土完存貝層）からは、太い沈線と楕描文・太い沈線と篋描文・太い沈線と太い隆線を加えた土器類が多く出土し、貝層下層部（アサリの多い黒褐色泥土破碎貝層）では第1トレンチから出土する縄文と竹管文と三角形彫刻文の加えられた土器が出土した。

このトレンチは、南端から4m地点のピットを境として北の部分には有機土層のみが存在し、貝層は見当たらない。また南端から2.5m

半の地点と7mの地点には基盤に達するピットがあり行基焼を含む有機層となっていた。

7月28日（晴）

今日も朝から暑い。

第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチのセクションを取る。

第3トレンチの南端部を東へ拡張発掘を行なう。貝層上面を出していくと、東端部の貝層が攪乱されていることを発見する。しかしその上部を蔽う表土層には攪乱の跡がみられない。あるいは人骨が埋葬されているのではないかと話しながら慎重に発掘をすすめたところ、夕方近くになって、はたして攪乱層下から人骨があらわれた。西南西に頭をおく仰臥屈葬で上体の周囲は大人の拳大程度の石でかこまれている。

そこで今日を最終日と予定していた発掘を明日まで一日延長することにした。

本日は三和東小学校校長原祐三氏が児童2名とともに発掘に参加された。児童は朝から熱心にむし暑いトレンチの中で土器検出に努力していた。

#### 7月29日(晴)

本日は人骨の発掘に重点をおいて丹念な作業をつづけた。一方では岩橋喜一教諭の指導のもとに三和中学校郷土史クラブ員による遺跡周辺地域の平板測量を行う。

人骨出土の報道で参観者がつめかけ、遺跡周辺は大変な賑わいであつた。

人骨はすでに形成されていた貝塚の一部を掘り起して埋葬したものと推定され、胴部は保存が悪く殆んど溶解してしまつていたが、頭部及び四肢の部分はやや保存がよかつた。そして人骨埋葬後の新しい貝層がうすくその上を蔽つていることがわかつた。このことは出土土器に上層と下層とでちがつていることが見うけられることと対応するごとくである。

午後の日も西山におちかかる頃、人骨埋葬状態の実測図を作成する。

#### 7月30日(晴)

郷土史クラブ員を2ヶ班に編成して、1班は発掘現場の埋め戻し作業、2班は本校で土器洗いを行う。

#### 昭和34年5月5日(晴)

名古屋大学地理学教室の井関弘太郎助教授と杉崎章氏に現地踏査をわずらわし、石瀬貝塚を中心とした縄文時代の生活復原を課題とした研究を委嘱した。

芳賀陽・磯部幸男の両氏そして新海も参加し、海岸から大野谷の奥へ向つて試錐作業をすすめ、久米と前山の両部落間の水田下に縄文時代海進期の汀線が埋没浜堤の形でこのつていることを確認した。

#### 昭和35年12月18日(曇)

主として新海が担当してきた出土土器の整理が一応完了したので、発掘調査を担当していただいた久永春男氏をはじめ、杉崎章・芳賀陽・田中稔・磯部幸男・加藤岩蔵の各位に参集をねがい、出土した縄文式土器の型式分類を中心とした研究会を開いた。会場は常滑小学校家庭科教室を借用する。

#### 註

##### 1. 三和中学校郷土史クラブ員

竹内 公男	竹内 司	浜島府次夫	築都 由也
竹内 士郎	片山 勝治	片山 孝治	竹内 常男
竹内 孝行	竹内 勘二	竹内 政義	竹内 輝治
浜島 稔	高橋 邦充	竹内 正	竹内 忠男
竹内 幸光	辻野 保史	辻野 和博	林 峯男
桑山 恭彦	村上すみ子	富田 孝子	久本 良子
芳山 圭子	都築富貴子		

### 第三章 遺 跡

石瀬貝塚は比高約10m、東東北方にむかつて緩い下り傾斜をなす東面の地点に形成されていて、面積約200平方m、東端が母子寮建築工事のため切断され、また中央部が南北に水道管施設工事によって攪乱されている。

現地表は、南の一部分は道路となり、貝塚の主要部分は梅林になつており、北端部は野菜畑となつて耕作されている。

この貝塚は前述のように母子寮建設のための地均しが開始された時発見されたのであるが、その切断面にあらわれた貝層は、耕作等で攪乱されている様子が認められなかつたので、これに平行して梅林の中央に南北のトレンチ（第1トレンチ）を設定し、次にこれと直交するトレンチ（第2トレンチ）を設定し、また第1トレンチを北方の野菜畑に延長したトレンチ（第3トレンチ）を設定した。

#### 第1トレンチ（挿図第五）

梅林の中央部に地均し工事にあつて作られた崖面に平行して掘つたトレンチで、南端は道路の側溝を起点として、巾1.5m・長さ6mのトレンチである。

起点の位置から北へ1.5m辺りまでの貝層はうすく、耕土層が厚くおおい30~40cm位になつており、北へ進むにつれて貝層が厚くなつて、中央部では耕土層は約20cm位である。

南端の部分では貝塚の下層部であるアサリの多い黒褐色破碎貝層が厚く、耕土層下に堆積して、道路の方に延びている。

貝塚の上層・中層はトレンチの南端より1m位のところから北へ延びている。中層は第2トレンチとの交点辺り（このトレンチの南から3~4m）で最も厚く30cm位あり、ハイガイの多い黒褐色混土完存貝層が急に落ちこんで、アサリの多い黒褐色混土完存貝層にかわつている。そして、この第1トレンチの北端になつて、アサリの多い黒褐色混土完存貝層の上部にハイガイの多い黒褐色混土完存貝層がのり、下層をなすアサリの多い黒褐色混土破碎貝層が消滅していることが認められた。

基盤は南から北へ極めて僅かの傾斜がみとめられ、貝層はトレンチの南端部で約20cm中央部で40~50cm、北端部で約30cmとなつていた。

上部貝層中にはかなりの灰と炭化物が発見され、また、貝層に混つている土も焼けていることが認められた。

土器の出土量は、他のトレンチに比して少なく、上層の黒褐色混土破碎貝層と中層のアサリ・ハイガイの多い黒褐色混土完存貝層から比較的多くの第三群土器と少量の第二群土器の出土があり、下層のアサリの多い黒褐色破碎貝層からは第一群土器が少量出土した。

#### 第2トレンチ（挿図第五）

第2トレンチは、第1トレンチの中央部において、それと十字に交叉するように、東西の方向に設定したトレンチである。

東端を母子寮の建築によつて切りおとされた崖の面の近くに定め、西端を梅林の西端においた長さ約10m巾約1mのトレンチである。

基盤は西から東にむかつて緩い下り傾斜を示し、貝層は西へ延びるにしたがつてうすく、梅林の西端付近で消滅している。

貝層の層序は、第1トレンチとほぼ同じ状態を示し、上層は黒褐色破碎貝層で厚さ約10cm、中層は西端から6m程東へ進んだ地点までは、ハイ貝の多い黒褐色混土完存貝層がこのトレンチの1m地点で10cm、3m地点で20cm、6m地点では25cm厚さで延びていた。それが第1トレンチと交叉する地点で急に落ち込んでアサリの多い黒褐色混土完存貝層がのつかつてこのトレンチの東端にむかつて延びていることが認められた。下層は混土率の少ないアサリの多い黒褐色混土破碎貝層で厚さ約10cmとなつていて、中層が最も厚く上・下層は中層に比して約半分の厚みになつていて、特にこのトレンチの中央部は調査経過の章でも述べたように水道線施設工事のために一部分に中層に達する攪乱がある。

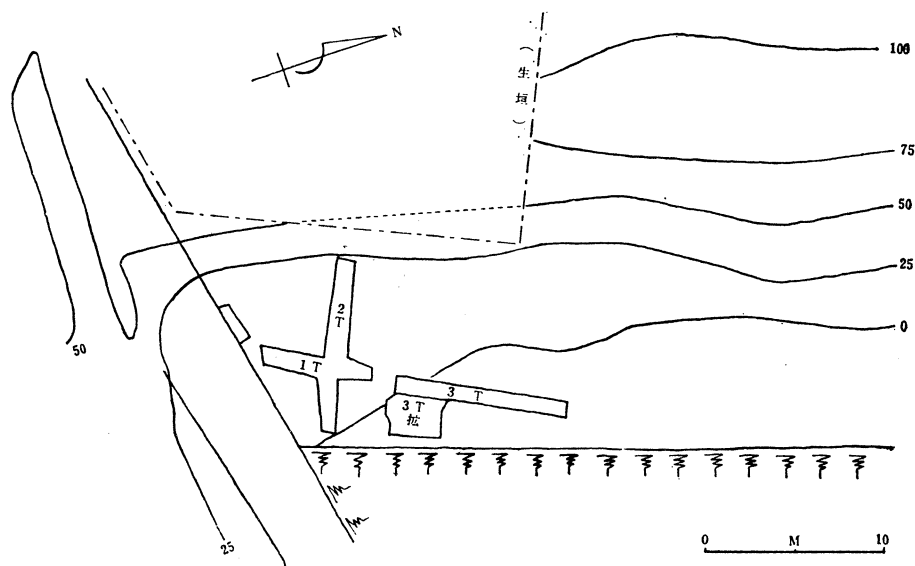
土器の出土状態は、中層貝層に最も多く、上層貝層・下層貝層は非常に少なく、中層貝層からは主として第三群土器の出土量が多くこれにまじつて第一・二群土器が出土し下層貝層からは第一群土器のみの出土をみた。

### 第3トレンチ (挿図第五)

第3トレンチは第1トレンチを北へ、野菜畑へかけて10m延長したものである。基盤は北へ進むにしたがつて緩く下り、貝層はこのトレンチの南端から4mの地点で消滅している。このトレンチの耕土層は第1・2トレンチに比較して深く、35~40cmを測る。耕土下には黒褐色有機土層が存し、この層はトレンチの南端から4m地点のピットを境にして北の部分では15~20cmの深さで基盤の上に堆積し貝層は見当らなかつた。しかし南の部分では、この層はきわめてうすく、その下に黒褐色混土破碎貝層が10~20cmの深さで堆積し、その下にアサリの多い黒褐色混土完存貝層が堆積して、中層貝層をなしていることを認めた。そしてその下層に混土率の少ないアサリの多い黒褐色混土破碎貝層がうすく踏みかためられたように固く地山にはりついてた。

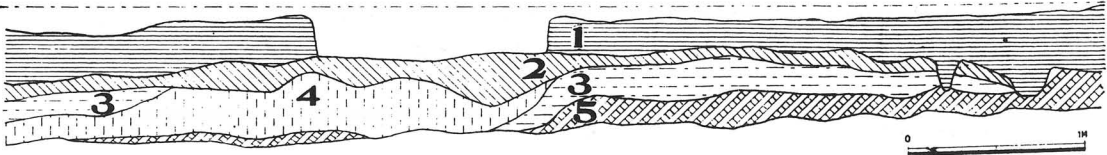
また、このトレンチで、南端から前述の4m地点のピットと同様に、2m半の地点と7m地点に黒褐色有機土層から貝層を切断して基盤にまで達するピットがあつた。そのピット内は行基焼を含む有機土がつまつており、山茶碗の破片が採集された。

山茶碗の出土するのは貝塚の外縁、すなわち第2トレンチの西端部にも見られること

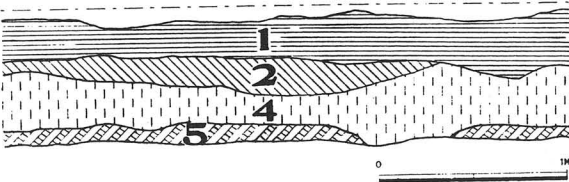


挿図第四 石瀬貝塚の発掘区と地形 (等高線の単位はcm)

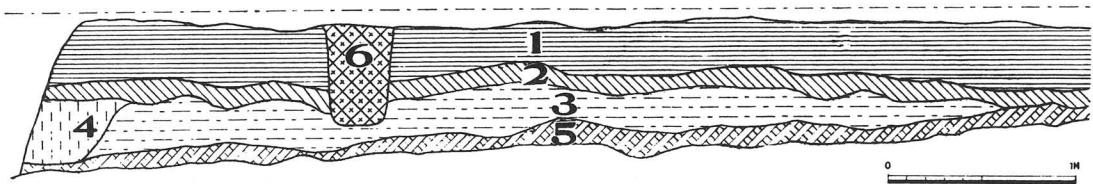
第1トレンチ (西壁)



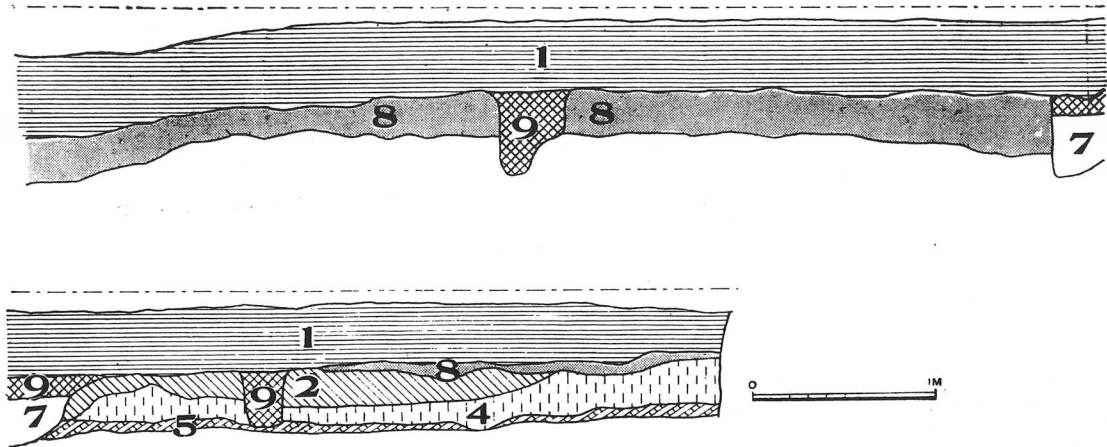
第2トレンチ (A区、北壁)



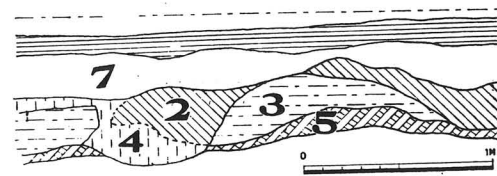
第2トレンチ (B・C区、南壁)



第3トレンチ (東壁)



第3トレンチ拡張区 (東壁)



挿図第五 発掘区の断面の実測図

1. 表土層
2. 黒褐色泥土破砕貝層
3. ハイガイの多い黒褐色泥土完存貝層
4. アサリの多い黒褐色泥土完存貝層
5. 混土率少なくアサリの多い黒褐色泥土破砕貝層
6. 水道管施設工事による攪乱層
7. 褐色土層
8. 黒褐色有機土層
9. 行基焼を含む有機土層



から、この貝塚が有機土層におおわれて後に、その上に山茶碗を使用した時期の人々が居住しておつたことが考えられる。

そして、縄文式土器が今回の調査において最も多量に出土したのがこのトレンチで、その出土土器の型式は、他のトレンチのそれとほぼ同様である。なお、この遺跡の主体をなす第三群土器の出土量は、黒褐色有機土層の深部に最も多く見た。

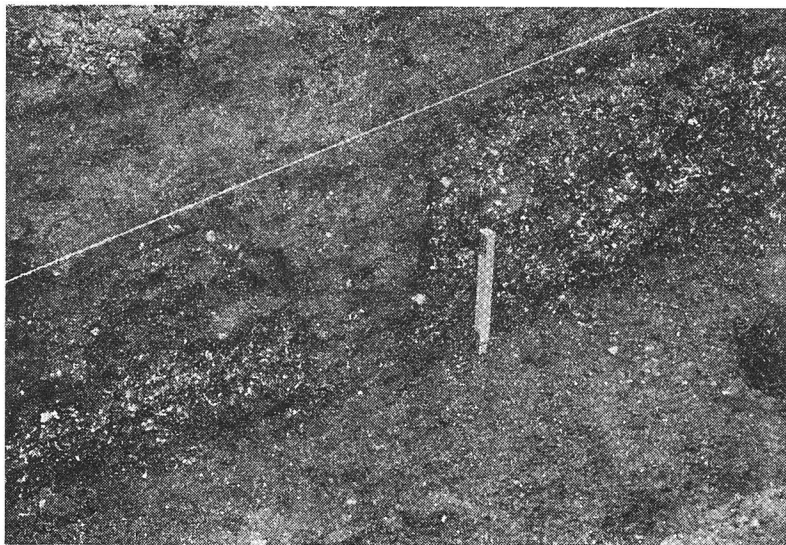
### 第3トレンチ東方拡張区（挿図第五）

第3トレンチの南部を3mの巾で、東方（母子寮建築工事で切断された崖の方向）へ2m拡張した。ここでは層序は他のトレンチとは異つてかなり攪乱されていた。基盤は東北へ向つた傾斜を示し、その基盤上に人骨が発見された。その人骨が埋葬されていた上部には黒褐色混土破碎貝層が存し、更にその上層は暗褐色土層がおおつていた。これによつて、この人骨の埋葬は、黒褐色混土貝層形成時期以前と考えられた。

四つのトレンチを総合してみると貝塚をおおう表土は30～50cmの厚みで貝塚の上層に達し、貝塚は梅林から北へ野菜畑にわたる約200平方mの範囲にみとめられ、中央部でおよそ60cmの貝層の厚さを形成し、上・中・下の三層に区分される。

上層は黒褐色混土破碎貝層、中層はアサリの多い黒褐色混土完存貝層がハイガイの多い黒褐色混土完存貝層にのつかるように接しており、下層は混土率の少ないアサリの多い黒褐色混土破碎貝層が踏み固められたように、基盤上に敷かれている。

遺物の出土は、貝層の中層の端に当る部分に多く、下層がこれに次いでおり、貝塚の端部には行基焼の山茶碗が包含された有機土層が拡がっていることが知られた。



挿図第六 第3トレンチ西側断面（柱穴状小ピットによつて貝層が切断されている）

## 第四章 遺物

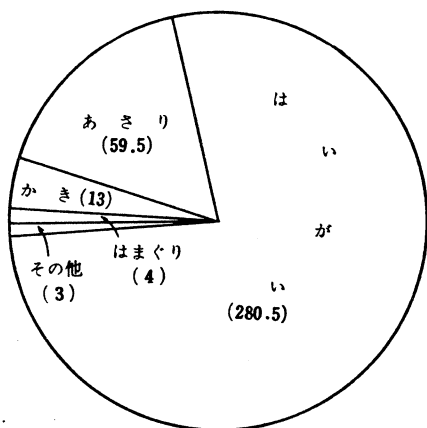
石瀬貝塚において出土した遺物は、貝類・獣骨・魚骨などの自然遺物と、石器・土器などの人工遺物、それに人骨1体分である。

### (1) 自然遺物

本遺跡から検出し得た自然遺物は付表第2の通りであつた。

#### 貝類

石瀬貝塚を構成する貝類は双殻類（ハイガイ・アサリ・マガキ・ハマグリ・サルボオ・シオフキ・カガミガイ・オキシジミ・オオノガイ・ミルクイ）の10種類と、腹足類（アカニシ・ウミニナ・フトヘナタリ・バイ・ツメタガイ）の5種類で、第2トレンチのB区で砂利質に1杯の貝類を採取して比率を見ると、ハイガイが4分の3を占め、アサリが残りの3分の2を占めており、貝の多くは破碎されていた。



付表第1 貝類の組成比率表

(久永直見・新海規男)

これらの貝類は浅海底に棲息したもので、アサリ・ハマグリ・オキシジミなどは現在も遺跡に近い伊勢湾沿岸の地域では遠浅で干潟となつたところで採取されることから、貝塚の前面に現在ひろがっている水田地帯がこれらの貝類の棲息した入海であつて、その当時容易にこれらの貝類を採取していたものであることが想像できる。

貝類の成長は現在と大差なく殆んど同じ位である。ハマグリの殻長5～6cm、アカニシの殻長10cm内外が大きい方である。しかしただ1個検出されたミルクイは殻長11cm×16cmで現在ではこの近くの海岸では得られない貝類であつた。

#### 魚類

魚骨は第2トレンチのB区、層序は黒褐色混土完存貝層から出土した。検出された魚骨はタイが多くカツオとフゲの骨片各1個もあつた。

タイは現在も伊勢湾内での漁獲は豊富であり、季節によつては糸釣りによる磯釣りでも容易に漁獲もできる。また、フゲは海水の表層或は表層に近い部分を常に游泳しているものでタイと同様にこの地方で今も糸釣りでも漁獲できる。このフゲは多少毒性を有することが知られているが、その肉は美味として食用されているもので、本貝塚ではその漁獲量については、検出骨片がただ1個という点で採捕量の多少については計り知り難い

のであるが、同じ伊勢湾にのぞんだ知多町八幡の西屋敷貝塚（註1）においては相当量の採捕を見ている点からここでも捕食された事は考えられるものである。

付表第2 自然遺物表

無脊 推動物	双殻類	ハイガイ	アサリ	サルボオ	マガキ	ハマグリ	オキシシミ
		カガミガイ	シオフキ	オオノガイ	ミルクイ		
	腹足類	アカニシ	ウミニナ	フトヘナタリ	バイ	ツメタガイ	
脊 推動物	魚類	タイ	フグ	カツオ			
	哺乳類	イノシシ	シカ				

### 哺乳類

獣骨は第1トレンチのB区、第2トレンチのB区・C区から検出され、その種類はイノシシとシカであった。

イノシシもシカも共に森林性野獣であるが、生態学的には、イノシシは湿沢地の多い低い山性林地を好み、シカは池沼にめぐまれた山地や、飲用水さえあれば、時にはやや高燥な深林中にも棲息できるといわれている。（註2）

このことは石瀬貝塚の位置から見てその四囲の地形より考えると、標高61mの青海山につづく丘陵とともにその間隙にある池沼、及び伊勢湾がかつて更に入江を形成していて、その入江につづく低湿地の存在などから、イノシシ・シカの棲息には好適であったであろう。

海にのぞんで築かれた貝塚としてその多くを海からの獲物に依存しながらも、一方ではイノシシ・シカなどの狩猟も行われたことも考えられるのである。

### 註

1. 2. 直良信夫「西屋敷貝塚発掘の自然遺物」（愛知県知多郡八幡町史資料第4集『西屋敷貝塚』所収1958年）

## (2) 人 骨

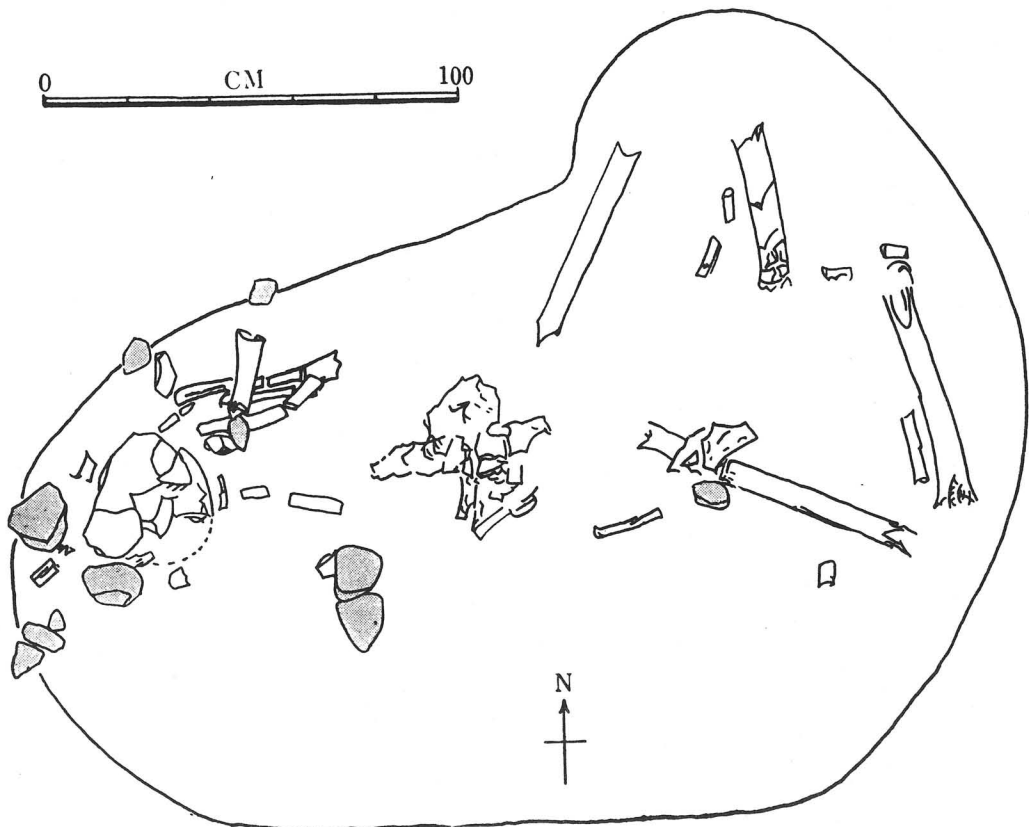
第3トレンチ拡張区を掘りさげていくと、地層が攪乱されていることを認めた（挿図第五、第3トレンチ拡張区断面図）。そして、基盤は東～北にむかつてゆるい傾斜を示していて、その基盤上に人骨が埋葬されていることを発見した。その埋葬状態は頭部を西南西におき、仰臥屈葬であり、人骨の保存程度は余りよくない。

人骨の埋葬穴は下層の第一群土器をふくむ破碎貝層を切つてつくられている。

そして、埋葬穴の有機土層の中で人骨と接して並べられたように発見された土器は、この遺跡の第三群土器すなわち加曾利E式後葉（石瀬型）の土器である。さらにこの埋葬穴をうめた土の上部には第三群土器をふくむ上層の黒褐色混土破碎貝層がのびてきている。

こうしたことから人骨は、すでに形成されていた下層貝層を掘りおこして埋葬された

ものと考えられ、その時期は上層の新しい黒褐色混土破砕貝層の成立する以前と考えられる。



挿図第七 人骨とその埋葬穴 (第3トレンチ拡張区)

付記

なお人骨の出土資料は東京大学理学部人類学教室の鈴木尚博士に研究を委嘱した。同博士よりその結果が報告される予定である。

### (3) 人工遺物

#### 石器

石瀬貝塚の発掘によつて採集された石器は、打製石鏃のみで、その数も未成品を含めて38例という少量にとどまつた。その出土量の内訳は付表第3の通りである。

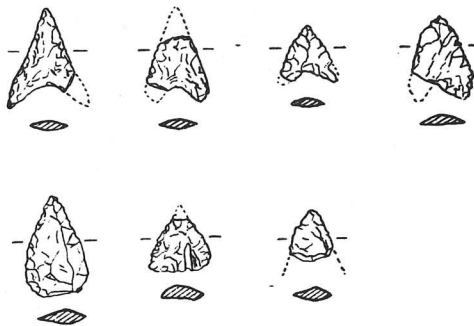
付表第3 石器のトレンチ別出土表

	1T	2T	3T	3拵	計
黒耀石製	0	2	3	8	13
硬砂岩製	0	3	13	9	25
計	0	5	16	17	38

石鏃は何れも無茎で、おおむね三角形をなすものと、三角形の底辺の部分を打ちかいた腸状形との2形態がある。(図版二・挿図第八)

石鏃の原料となつている岩石は黒耀石と硬砂岩であつて、硬砂岩は古生層の地帯で産するもので丘陵のすべてが第三紀層に属する知多半島には此の層の露頭は存在しない。遺跡に近い地方で強いて産地を求めると、尾張北部の犬山か定光寺の地域または海を渡つて渥美半島にいかねばならないといわれている。(註3)

しかし、石鏃の材料となる程度の岩石は、その露頭する地域に行つて求めなくても、小さいかたまりで十分であり、遺跡周辺の丘陵に大小の礫の形で存在し容易に手に入れることができたものであると推察されている。しかし、黒耀石はこの地域で採集することはできないので他地方(おそらく長野県の和田峠地方)から移入されたものである。



挿図第八 石鏃実測図 (縮尺二分の一)

#### 註

3. 杉崎章・直良信夫・久永春男『西屋敷貝塚』(前掲)

#### 行基焼

第2トレンチの上層と第3トレンチの上層からは、俗に行基焼といわれる中世の古窯製品が若干検出されている。

その量は大形の甕の資料が二片と山茶碗が約10個体分ならびに小皿が1個体である。行基焼は山茶碗と小皿の型式をもとにして三型式に編年され、それぞれ前・中・後の

3 時期に区分されている。(註 4)

本遺跡の行基焼製品には、その全体の器形を復原できるような資料はなく、すべてが細かくわれた破片であるが、小皿の底部に高台がみられず、しかも未だ底面がせまく、坏形を保っていることや、山茶碗において器体の反りは幾分あるものの底部の高台の付け方が粗雑であることなどから、行基焼第二型式の特徴がみうけられる。

甕の資料は肩部であり、押印が数個付されている。

遺跡から約 1 km も東方へ隔つた知多半島の丘陵中央部には常滑古窯址群(註 5)と称される行基焼古窯の濃厚な分布が発見されているが、本遺跡発見の資料もこの古窯址群で生産されたものであろう。

そして行基焼第二型式の時期は、同型式の巽が丘第一号窯(愛知県知多郡知多町)の熱残留地磁気による年代測定(註 6)からほぼ 13 世紀と推定されている。

#### 註

4. 杉崎章・渡辺直経・久永春男『巽が丘古窯址』(愛知県知多郡知多町八幡公民館刊・1960年)
5. 沢田由治「平安——室町の常滑」(『世界陶磁全集 2』所収・1957年)
6. 渡辺直経「巽が丘古窯の地磁気年代的考察」(前掲『巽が丘古窯址』所収)

#### 縄文式土器

今次の調査で採集した縄文式土器の量は次の表に掲げたとおりであるが、包含層ならびに土器型式から以下に述べる 3 群に大別される。

付表第 4 採集土器片層位別数量表

トレン チ	層序別 各部名称	上層出土			中層出土			下層出土		
		有文	無文	その他	有文	無文	その他	有文	無文	その他
第 1 トレン チ	口縁部		2		2	5				
	胴部	2			44	185				
	底部					3				
第 2 トレン チ	口縁部		1		7	1		2	3	
	胴部	6	8	10 (行基)	141	361		10	19	
	底部		1			13			1	
第 3 トレン チ	口縁部	5	2		4	1		7	1	
	胴部	87	395		89	44		676		
	底部				2	2		1		
第 3 区 トレン チ	口縁部	10	8	45	6	16	2	4	13	
	胴部	136	90	(行基)	205	316		121	191	
	底部	6	7		10	15		10	23	
土取 作業	口縁部	11	17							
	胴部	199	444							
	底部		10							

#### 第一群土器

第一群土器は、下層の混土率の少ないアサリの多い黒褐色混土破砕貝層(2 T・3 T 3 T 区)から出土しており、黒褐色を呈し、質がもろく焼成はよくない。そして器形はすべてが鉢形土器である。半割竹管を主要な施文具とし、口辺部の直立乃至外反りした

器形が多く、文様によつて次の様に類別できる。

- (1)半割竹管によつて口辺外面にいわゆる爪形の刺突文を加えたもの (挿図第九 1~8)  
図版四 1~9)
  - (2)半割竹管によつて胴部に爪形文様を連続して加えたもの (挿図第九 9~10)  
図版四 10~12)
  - (3)半割竹管によつて平行線を引き、その凸起した部分に爪形を刺突したものの、及び半割竹管をうつむけに押しつけ、隆線状となつた部分に爪形文を加えたもの  
(挿図第九 11~21)  
図版四 13~24)
  - (4)竹管によつて平行線状に沈線を施し、その沈線に囲れた部分に縄文を施したものの、及び沈線部にむかつて三角形の刺突彫刻文を施したもの (挿図第九 23~30)  
図版四・五 25~38)
  - (5)半割竹管によつて何条かの平行線を施し文様化したもの (挿図第九 31~39)  
図版五 39~54)
  - (6)縄文のみ施したものの、及び口辺部の内側にまで縄文を施したもの (挿図第九 40~41)  
図版五 55~57)
- 以上、第一群土器として類別した土器のうちには西日本的な要素と東日本的な要素とが見られるが、本貝塚ではそれはきりはなし難い一群を形成していた。  
この地方の中期前葉におかれる土器型式である。

## 第二群土器

第1トレンチ、第2トレンチからの出土は極めて少量で数片にどどまり、第3トレンチからの出土が主である。

第1、第2トレンチでは、中層のハイガイの多い黒褐色混土完存貝層・アサリの多い黒褐色混土完存貝層に包含され、第3トレンチでは、やはり第1トレンチ、第2トレンチと同じ層と下層の混土率の少ないアサリの多い黒褐色混土破砕貝層の上部から出土している。暗褐色を呈する外反りの深鉢形が多く、文様によつて次の類別ができる。

- (1)波状口縁をなし、二条の太い沈線を平行に施し、その囲みの内に縄文を施したもの  
(挿図第十 1~9)  
図版六 1~8)
- (2)平口縁であつて、ヘラ状施文具によつて平行線・渦文・楕円形等の沈線を加え、区劃内に縄文を加えたもの (挿図第十 10~13)  
図版六 10~11)
- (3)ヘラ状施文具によつて沈線を加え、区劃内の一部に刺突を施し文様化し、他の区劃内に縄文を加えたもの (挿図第十 14~17)  
図版六 12~15)
- (4)胴部を隆線によつて区劃し、その内部に縄文を加えたもの (挿図第十 18)  
図版六 16)
- (5)ヘラ状施文具によつて沈線を施し、燃糸文を加えたもの (挿図第十一 26~32)  
図版七 26~37)
- (6)平たい紐状の粘土をはりつけて口縁部を作っているもの (挿図第十一 22)  
図版六 17~20・25)
- (7)口縁部を波状にして変化を与えたもの (挿図第十 19)  
図版六 22)
- (8)口縁部に粘土紐を加え、その部分に刺突して文様としたもの  
(挿図第十・十一 20~21.23~25)  
図版六 20・24)
- (9)半割竹管によつて何条かの沈線を施し文様化しているもの (挿図第十一 33~44)  
図版七 38~46)

以上、第二群土器としてあげたものは出土量から言つて最も少ないのであるが、知多半島の先端に近い南知多町咲畑貝塚(註7)の第一群土器として類別され、咲畑式土器と命名されているものと型式を同じくしており、関東地方において加曾利E式土器の新しい時期のものとの関連が考えられるものである。

ただし(5)として類別したものは、咲畑貝塚では発見されていない。

### 第三群土器

第三群土器は石瀬貝塚の主体をなす土器群で、第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチともに多量の出土をみた。

その出土の層序は、第1トレンチにおいてはハイガイの多い黒褐色粘土完存貝層・アサリの多い黒褐色粘土完存貝層であり、第2トレンチにおいては、下層の粘土率の少なくアサリの多い黒褐色粘土破碎貝層の上部に見られ、第3トレンチにおいては、黒褐色有機土層の深部にその出土が見られ、拡張区ではハイガイの多い黒褐色粘土完存貝層の深部から多量の出土を認めた。

多くは褐色を呈し、器形は鉢形であるが、把手の付けられたものもある。

(1)へら状施文具によつて太い沈線で区画し、その内部に沈線で斜線列を加えて文様化したもの (挿図第十二 1~16)  
(図版八・九 1~21)

(2)へら状施文具による太い沈線で区画し、その内部に刺突を加えて文様化したもの (挿図第十二・十三 17~24)  
(図版九・十 22~33)

(3)口縁部に刺突列を加えているもの (挿図第十三 25~29)  
(図版 十 34~39)

(4)へら状施文具によつて太い沈線によつて渦紋を描いて文様化したもの (挿図第十三 30~39)  
(図版 十 40~50)

(5)粘土紐による隆線をめぐらし、更に沈線を加えて図様化したもの (挿図第十三 40~43)  
(図版十・十一 54~59)

(6)粘土紐によつて隆線を施し、一面に櫛状施文具によつて斜位に条線文を施したもの (挿図第十三 44~46)  
(図版十一 60~66)

(7)口縁や、二条の沈線内にハの字状の刺突文を連続して施したもの (挿図第十三 47~49)  
(図版十一 67~69)

(8)粘土紐によつて隆線を施し、隆線上に連続して刺突を加えたもの、及びその下部に縦列に櫛状の沈線を施したもの (挿図第十三・十四 50~60)  
(図版十二 70~90)

(9)粘土紐によつて隆線を施し、隆線の部分に圧痕列を加えて文様としたもの (挿図第十四 61~63)  
(図版十二・十三 92~96)

(10)へら状施文具によつて太い沈線を多数施し、その間隔内に細い沈線を施して文様化したもの (挿図第十四・十五 64~91)  
(図版十三・十四 97~124)

等々である。

これらの要素から第三群土器として分類したこれらの土器は縄文文化中期末葉に比定できるものと考えられ、西三河台地における刈谷市山の神遺跡(註8)出土の土器に酷似している。

### 註

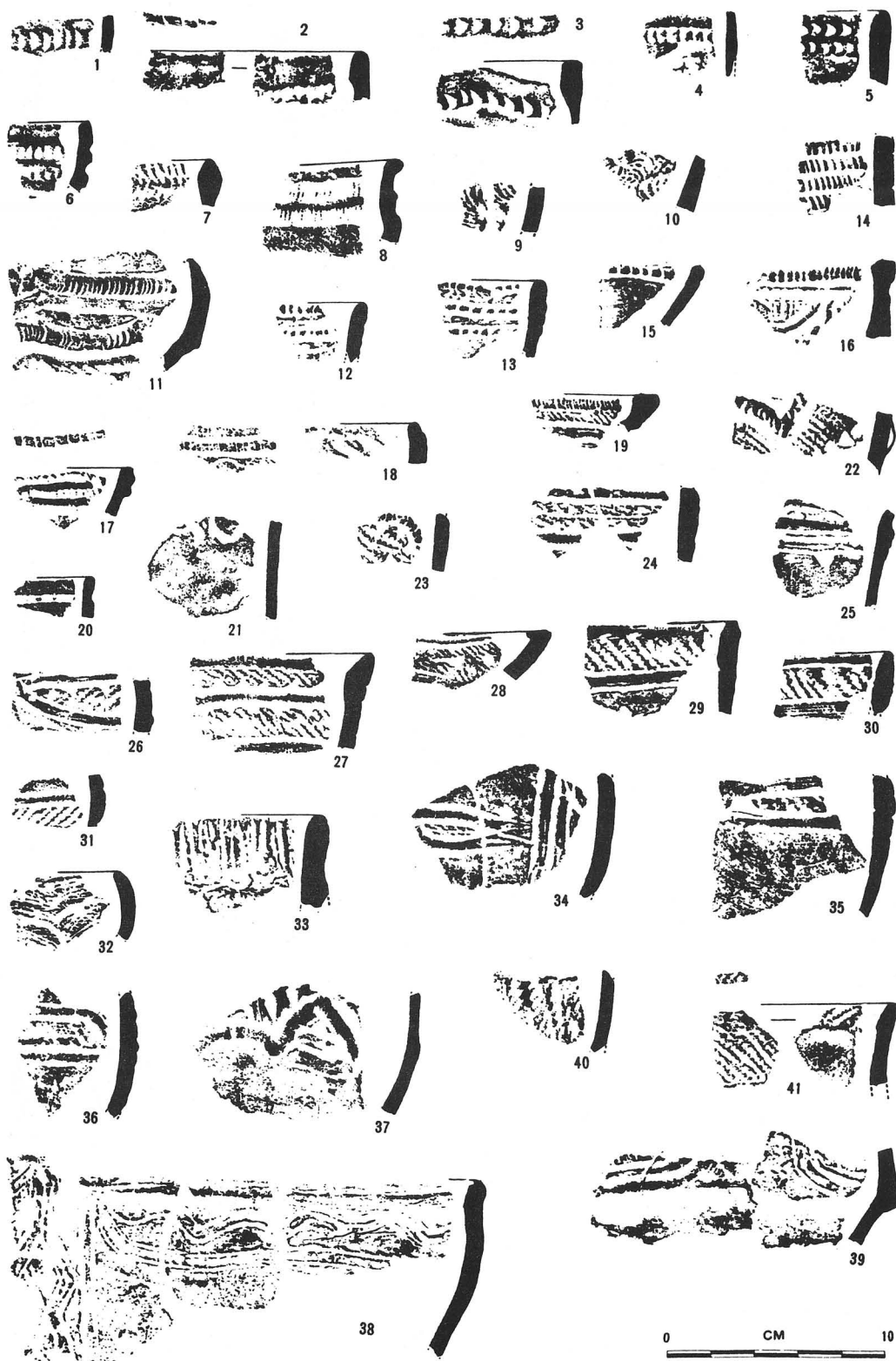
7. 磯部幸男・井関弘太郎・杉崎 章・久永春男 『咲畑貝塚』

(愛知県知多郡師崎町師崎中学校 1960年)

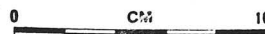
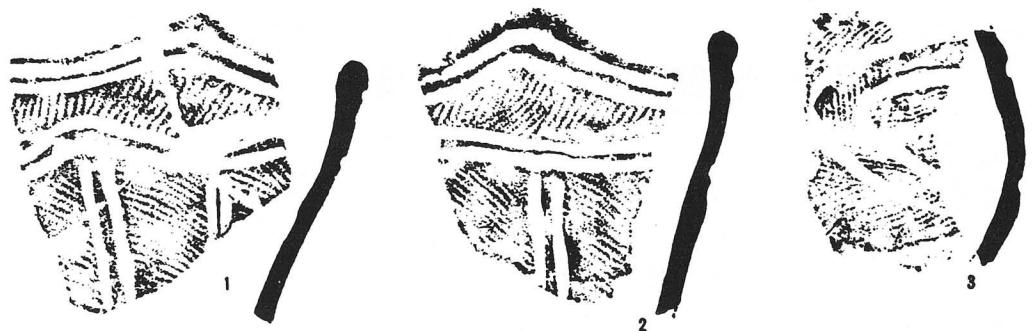
8. 加藤岩蔵 『山の神遺跡と天子神社貝塚』 (刈谷市文化財保護委員会 1961年)

(新海公夫)





挿図第九 第一群土器の拓影



挿図第十 第二群土器の拓影



挿図第十一 第二群土器の拓影



挿図第十二 第三群土器の拓影



挿図第十三 第三群土器の拓影



挿圖第十四 第三群土器の拓影



挿図第十五 第三群土器の拓影

## 第五章 石瀬貝塚出土の縄文式土器の 相対年代

石瀬貝塚の貝層は上・中・下三層から成っていた。下層はアサリの多い黒褐色泥土破碎貝層で、薄く広く堆積しているが、ところどころとぎれている部分も見られる。中層は黒褐色泥土完存貝層で、地点によつてアサリの多い層とハイガイの多い層とがあり、下層貝層のとぎれている部分にも堆積し、また下層貝層が終つている第1トレンチ南部からさらに南方の道路の方へも広がつていて、堆積年代を異にした別個の貝層であることがわかる。上層は黒褐色泥土破碎貝層で、ほぼ貝塚全面を蔽うており、第2トレンチ西端の中層貝層が終つた地点では直接下層貝層上につていて、一見独立した貝層の如くであるが、包含する土器はそれが被覆している貝層とその型式を一にし、実は被覆されている貝層の表層が踏みしだかれたり、耕されたりして、破碎したものであつた。すなわち石瀬貝塚の貝層は基本的には下層の黒褐色泥土破碎貝層と、中層の黒褐色泥土完存貝層群とから成り、中層の黒褐色泥土完存貝層群は時期によつてアサリの多い層を形成し、またハイガイの多い層を形成したのであつた。

石瀬貝塚出土の縄文式土器は、そこで包含層の層序によつて、下層貝層出土土器と中層貝層群出土土器とに大別される。

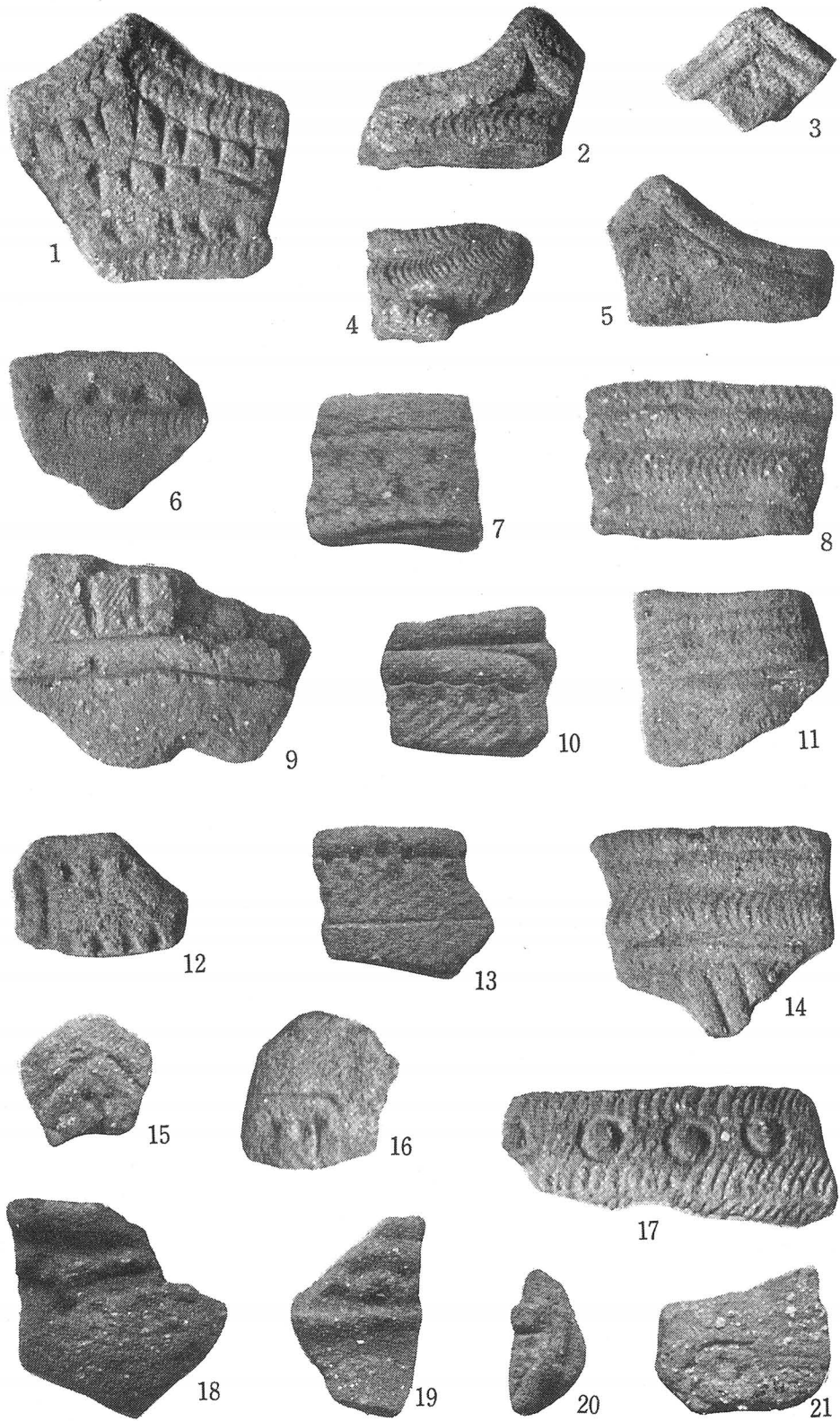
### 下層貝層出土土器

下層貝層出土土器は、器形はすべて鉢形で、半割竹管を主要な施文手段とする。しかし文称の加え方により、それは4類に類別される。

- a類 半割竹管の弧を仰向けにして、土器面に斜めにおしつけて、連続爪形文を形成したものの（挿図第九1～10）。
- b類 半割竹管の弧を俯向けにして引いた隆線のような見かけの中高の平行線の上面に、やはり俯向けの半割竹管を斜めにおしつけて形成した隆起爪形文（挿図第九11～13・15）および粘土紐をはりつけた隆線上に隆起爪形文を加えたもの（挿図第九22）。
- c類 無文または縄文を地文として施した器面に、半割竹管による平行線で意匠を描いただけのもの（挿図第九29～39）。
- d類 縄文地に半割竹管による平行線で意匠を描き、その平行線に沿うて、縄文が施されている部分に楔状に三角形の彫刻を連続して加えてある（挿図第九24～28）。平行線内に隆起爪形文を加えたもの（挿図第九23）もある。

このうちa類およびb類は、この地方では縄文文化前期の中葉から後葉にかけて盛行する手法であるが、d類は中期初頭にいたつて一般化する（註1）手法である。そして注意すべきは豊川中流の新城市有海上の平遺跡（註2）では、d類がa類・b類を伴わないで単純に発見されていることである（挿図第十六）。上の平遺跡出土土器が関東地方の五領台式土器と親縁関係を有する土器型式であることについては、かつて触れたことがある（註3）が、石瀬貝塚下層貝層出土土器はすなわちd類をメルクマールとしてその時期が中期初頭に位置づけられるとともに、また二系統の土器型式が複合した様相であることが知られる。





挿図第十六 愛知県新城市有海・上の平遺跡出土土器 (約 $\frac{1}{2}$ 大)

## 中層貝層群出土土器

中層貝層群出土土器も器形はすべて鉢形であり、形態と文様によつて、次の8類に類別される。

**a類** 口辺部はキアリパー状に内側へ彎曲し、器壁は薄手である。器面に地文として縦位の燃糸文を施した後、細い棒または篋による沈線で意匠を描く。口辺部に局部的に隆線を副えてある例（挿図第十一26～27）がある。口辺部に2条の平行線をひき、その区劃内に圧痕列を千鳥に加えて、高く残された部分がさざなみ状の波文を描く手法（挿図第十一26）や、胴部に篋又は半割竹管によつて横位にめぐらしたジグザグ文（挿図第十一31～32）も特徴をなす。

**b類** 縄文を地文とし、太い沈線で意匠を描く。口辺部の形態によつて2類に細別される。

**I** 口辺部がキアリパー状をなしてなだらかに内彎し、口縁は平らである。太い沈線による渦文または縦位の短線列で口辺部を数区に分け、その中間に不規則な偏円形や半月形を区劃し、その内部に縄文を加え、その区劃の下方には太い沈線による連弧文を配する構図（挿図第十13～14）は特徴的である。

**II** 口辺部は直口ないしわずかに内彎する形で、口縁は平らなものとは波状をなすものがある（挿図第十1・2・7・10）。意匠は口辺部に集中せず器体全面に加えられる。

**III** 類と推定される胴部破片に、磨消縄文風の文様構成（挿図第十8）も見られる。

**c類** 口辺部はキアリパー状に内彎し、器壁は薄手である。地文を施さず、単純に沈線のみで意匠を描く。口縁に平行して1条又は2条の横線をめぐらし、それから垂下せしめるかのように、その下方に2条ないし3条の連弧文を加えた構図（挿図第十一42～43）がa類の構図に類似するのみでなく、口縁部の2条の平行線内に刺突文列を加える手法（挿図第十一39・43）は、a類の千鳥圧痕列の簡略化されたものと見なしてよいであろう。

**d類** 口辺部がやや内彎するものと直口のものがあり、器壁はやや厚手である。地文を施さず、太目の施文器具による沈線と刺突文とで意匠を描く。構図によつて4類に細別される。

**I** 太い沈線によつて、渦文や蕨手文や長楕円形等の曲線文を単純に描いたもの（挿図第十三30～39）。

**II** 口辺部には、1条又は2条の沈線でかこんだ不規則な長円形や半月形を配し、その内部には斜線（挿図第十二1～5・13～14）又は刺突文（挿図第十二21～22、挿図第十三23～24）を加える。胴部は2条又は3条1組の垂線で数区に分け、各区劃は斜線でうづめる。斜線は縦位の羽状に加えられる例が多く、また斜線間に1条の縦位の蛇行線を加えたもの（挿図第十五81～83）もある。2条の垂線の間刺突文列を加えたもの（挿図第十二17～18）もある。

**III** 口辺部から胴部へかけて、1条又は2条の沈線による縦に長い楕円形（挿図第十二6、第十五79）又は長方形（挿図第十五77・80）を数個配列し、図形内は斜線でうづめる。図形間に蕨手文や斜線を加えた例（挿図第十五79）もある。

**IV** 口唇を内外に肥厚せしめ上面を平らにした口縁部を4区分し、彎曲した長楕円形4個から成ることくに作り、口唇上面には刺突文列が加えられている。なだらかに

- 内彎する口辺部には3条の横線をめぐらし、胴部は2条1組の垂線によつて8区分され、各区は交互に左傾又は右傾の斜線でうずめられている(挿図第十二10)。
- e類 器形はd類にほゞひとしいが、施文手段として篋状器具と櫛状器具とが併用されている。構図によつて2類に細別される。
- I 口辺部に刺突文帯をおき、胴部には櫛描き垂線を配する(挿図第十三27~28)。
- II d-I類と構図を一にするが、区劃内の充填文として櫛描き斜線が用いられている(挿図第十四65~68・70・73)。地文として櫛描き斜線を用いた例(挿図第十五75)もある。
- f類 器形はd類にほゞひとしいが、口辺部が外反する例(挿図第十四53)もある。施文手段として隆線が用いられている。隆線の配し方に3種類ある。
- I 胴部を、やや細目の隆線を縦位または横位に走らせて区分し、隆線間には篋描き沈線文(挿図第十三40~41・46)や櫛描き充填文(挿図第十三44)が加えられている。
- II 隆線と太い沈線とを組合せて図形の区劃に用い、図形内には櫛状器具(挿図第十三47、第十四62)半割竹管(挿図第十四55)などによる充填文が加えられている。隆線の外側の凹部に刺突文列が加えられているもの(挿図第十三47 第十四55)もある。
- III 口辺部から胴部へうつるくびれ部に、圧痕を加えた隆線を横位に<sup>から</sup>絡げ縄状にめぐらしている(挿図第十四51~54・61~62)。胴部の篋描き垂線を、この隆線を起点にして引いてある例(挿図第十四51・54)も見られ、また圧痕のない隆線を垂線にした例(挿図第十四58)も見られる。
- 絡げ縄状に横走する圧痕を加えた隆線に環状の耳が附加せられている例(挿図第十四72)も見られる。
- g類 直口の口辺部の口端を外方へ折返して厚くし、口唇部に連続刺突文を加えてある。器体外面は無文である(挿図第十一23~25)。
- h類 直口の土器で器体外面は無文、薄い口唇部に連続して<sup>さぎ</sup>圧痕が加えられ、口縁が<sup>なみ</sup>小波状をなしている(挿図第十19)。

a類における縦位の燃糸文を地文にして沈線で意匠を描く手法は、この地方では北屋敷式土器(註4)において盛行する手法であるが、豊川中流の新城市有海字篠原遺跡では加曾利E式の古い時期に対比せられる土器と伴なつて発見せられている(註5)。しかし加曾利E式の新しい時期に比定せられる豊川下流の豊川市麻生田遺跡下層出土の土器や、天竜川中流の静岡県磐田郡佐久間町佐久間遺跡出土土器中には、この手法はすでに見られない。また加曾利E式の新しい時期に並行して三河湾沿岸地域に分布した咲畑式土器(註6)の標式遺跡である知多半島南端の知多郡南知多町師崎大字片名の咲畑遺跡第1号貝塚においても、a類はやはり見られなかつた。けだしその用いられた期間は長くはなかつたようである。しかしその分布は広く西へ拡がり中国地方で里木II式(註7)と命名されている土器型式もまたその手法を一にする。

b類のうち、I類はまぎれもなく咲畑式土器である。しかしII類は施文手段からいうとI類とひとしいが、構図からいうとむしろd類と一致し、また咲畑第1号貝塚においては、このII類が見られなかつたことは注意すべきであろう。

c類は形態と構図でa類にほゞ一致し、a類に伴存したものと見てよいであろう。

d類・e類・f類は、形態、施文手段、構図において互いに共通するところが多く、

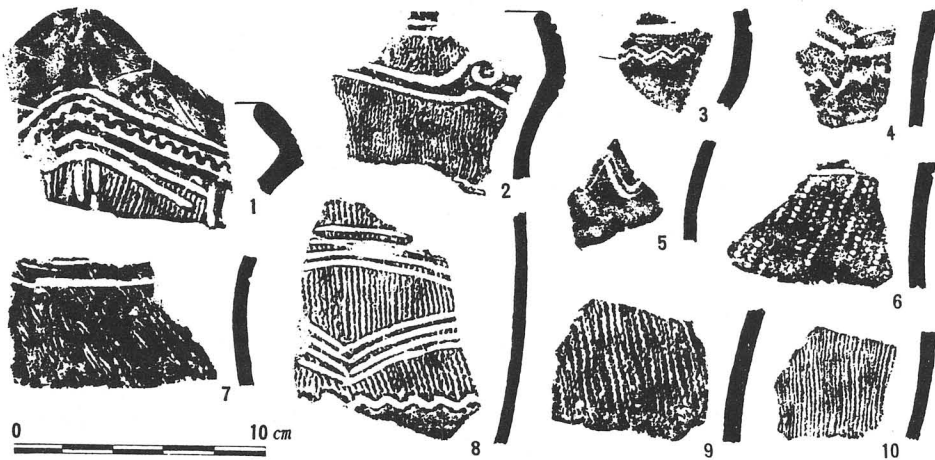
相伴なつて一つの群を形成していたものとしてよい。すなわちこれと同一型式の土器として、刈谷市山池町山の神遺跡出土土器（註8）があげられる。その構図には加曾利E式土器の特徴が明らかに投影されているが、口辺部の文様において隆線が退化して、太い沈線が文様の主体となり、胴部の隆線には圧痕が加えられ、刺突文と環状の耳が盛行するなどの点で、加曾利E式土器の最も新しい時期に比定されると共にいちじるしい地方色が認められる。そして山の神遺跡においては資料は多くなかつたがこの型式の土器が竪穴式住居址から単純に発見され、a類やb-I類は伴存しなかつた。

g類・h類は咲畑式土器にも見られるが、施文手法の共通から推すと、あるいはなおd類・e類・f類にも伴つた可能性もある。

かくて中層貝層群出土土器は、a類とc類から成るA群、b-I類にg類・h類が加わるB群、d類・e類・f類を主体とし、おそらくb-II類が加わり、あるいはさらにg類・h類をも含んだ可能性もあるC群の3群に分けられ、しかもそれは同一型式内における多様性 (variety) の類別ではなく、それぞれ別型式と見なしうるものであつた。

そうするとこの3群の土器が、石瀬貝塚においては同一時期に並存していたのか、互に先後関係にあつて順次に交代したのかが問題となるが、貝塚が梅林中にあつて樹根がのび広がり、またところどころ攪乱されてもいて、包含層（貝層）の層序によってそれを明確にするにはいたらなかつた。たゞ第3トレンチにおいて黒褐色有機土層下部ならびに人骨埋葬穴周辺から、C群土器のみが単純に発見され、A群ならびにB群とは独立して存したらしいことが推定された。それは山の神遺跡においてB群土器が見られず、咲畑第1号貝塚においてC群土器が見られないことと呼応するところでもある。

次にA群とB群との相互関係であるが、咲畑第1号貝塚においては、A群土器は全然見られなかつた。しかしいま石瀬貝塚のA群土器と新城市篠原遺跡のそれ（挿図第十七）とを対比してみると、資料が少ないので断定はまだ早いですが、そこには一見かなりな様



挿図第十七 愛知県新城市有海・篠原遺跡出土土器の拓影

相の差異が認められる。そして篠原遺跡例が先行した北屋敷式土器のそれに近いのに対して、石瀬貝塚のA群土器はその形態においてむしろb-I類土器（すなわち咲畑式土器）とほとんど一致し、また口辺部に連弧文をめぐらす構図は、咲畑式土器の特徴をなす構図の一つでもあることが注意を惹く。すなわち石瀬貝塚のA群土器は、この種の施文手法を用いた土器の最も新しい型であつて、B群土器（すなわち咲畑式土器）に伴存

したのではないかと推測される。A群とB群の出土量がともにまことに少量であることも、また両者が相伴なつて1群を形成していただのではないかと推測を濃くする。もしそうだとすると、石瀬貝塚出土の縄文式土器は3群5型式となり、その相対年代は次のごとくなる。

群	型式	メルクマールとなる土器文様	相対年代
第1群	型式 I	下層貝層 a類	中期前葉
	型式 II	下層貝層 d類	
第2群	型式 III	中層貝層群 a類	中期後葉のなかば頃
	型式 IV	中層貝層群 b-I類	
第3群	型式 V	中層貝層群 d類・e類・f類	中期後葉の末

そして第3群(型式V)土器は、さきに刈谷市山の神遺跡において方形の竪穴住居址をとともなうことがわかつたが、出土土器が少量で、かつ保存が悪く、その特徴を詳かにすることができなかつた。このたび石瀬貝塚において多量の資料を得ることができて、それが広義の加曾利E式土器の最も新しい時期に属すること、しかしまた刺突文・圧痕を加えた隆線・環状の耳の盛行など、かなりの地方色を有することが確認せられた。そこで広義の加曾利E式土器の最も新しい時期のこの地方における地方型(註9)という意味で、本貝塚の名を冠して石瀬型として概括し、今後そのくわしい文化内容ならびにその分布圏の範囲などの調査をすすめてゆくこととしたい。

#### 註

1. 三角形彫刻の出現はこの地方でもすでに前期末の十三坊台式土器において見られるが、それは多様な施文手法の一として、たまたま用いられているにとどまり、まだ一般的ではなく、また施文の様相をやや異にする。
2. 夏目邦次郎『大昔の新城』新城町教育委員会 1957年
3. 夏目一平・久永春男『大根平』津具郷土資料保存会 1955年
4. 愛知県渥美郡渥美町石神字北屋敷貝塚出土土器を標式とする。東海地方から瀬戸内東部にわたって分布している。
5. 山本一三二氏採集資料による。
6. 磯部幸男・井関弘太郎・杉崎章・久永春男『愛知県知多郡師崎町咲畑貝塚』師崎中学校 1960年
7. 鎌木義昌・木村幹夫「各地域の縄文土器—中国」日本考古学講座第3巻 1956年
8. 加藤岩蔵『山の神遺跡と天子神社貝塚』刈谷市文化財保護委員会 1956年
9. その分布については、現在まだ知見が乏しいが、碧海台地では山の神遺跡のほか、刈谷市一ツ木字茶煎坊遺跡があり、矢作川の東の台地では男川中流の岡崎市丸山町村上遺跡からもほぼ同型式とみなされる土器が出土している。すなわち知多半島から矢作川下流流域にわたる地域が知られている。

(久永春男)

## 第六章 石瀬貝塚を主とした大野谷の 先史地理的考察

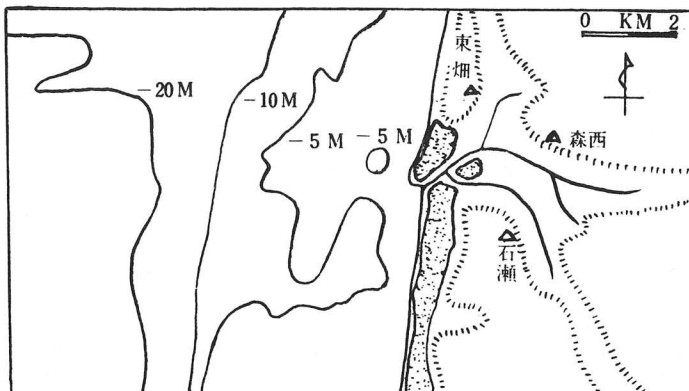
### (1) 海進期以前における原地形

伊勢湾の海図をみればわかるように、知多半島の西海岸に沿って、棚状となつたほぼ水平の浅海底（水深6m以浅）が、海岸線から数kmの沖合までつづいている。この部分の地質は、海底面下の極く浅所から、知多半島丘陵部のそれとおなじ新第三紀層からなつてゐる。このことからみて、上記の棚状の浅海底は、知多半島西岸が波浪により削りとられ、その跡にできた海蝕棚であることがうかがわれる。

大野谷の沖合には、海図の等深線を追つてみると、棚状の浅海底をさらに5m内外えぐつたような谷状の地形（挿図第十八）が認められる。伊勢湾灯標を大野町の沖合に建設する際この谷状部においてもボーリング調査を行つたのであるが、その結果によると海面下約30mまで、軟弱な沖積層がつづいており、埋積谷であることがわかつた。この海底沈水谷は、海面が現状より80～100mも低く伊勢湾全体が陸地となつていた洪積世末期ごろの、大野谷の延長部を示すものである。

そのころの東海地方の海岸線は、渥美半島の南方15～16km付近にあつたと考えられ、現在の伊勢湾は、木曾川の河谷としての陸地であつた。もちろん、本流である木曾川には、西側からは鈴鹿・宮川などの支流が入り、また、知多半島の側からも大野谷の川や天白川が流入してゐた。これらの支谷も現在の谷底面より下方に当時の谷底をもつてゐたことはいうまでもなく、天白川の場合、現河口付近で-22～25mの下部にそのころの谷底面を認めることができる。大野谷もその例外でないことは、上記の伊勢湾灯標ボーリング結果をみても明らかである。言葉をかえれば、沖積世初期の海進現象が始まる前の大野谷の原地形は、現在の谷より15～30mほど深い。また、もつと西南方へ延びてゐた侵蝕谷であつたのである。

現在の大野谷下流部の水田地帯は、上記のごとき侵蝕谷が沖積世の海進により沈水して入江化し、さらにそれを埋めたる沖積層の堆積により形成された沖積地なのである。同様なことは大野谷の本谷だけでなく、神田川や前山川の谷についてもいえることである。ただ、大草と石瀬の両台地の東側は、小規模ではあるが地質構造線（断層線）に沿



挿図第十八 大野谷沖合の伊勢湾等深線図

う谷地と推定することができる。したがつて神田川・前山川の谷は、断層線に沿つて侵蝕が進んできた断層線谷であり、それが沈水し、さらに埋積されて今日の状態を呈したものと思われる。

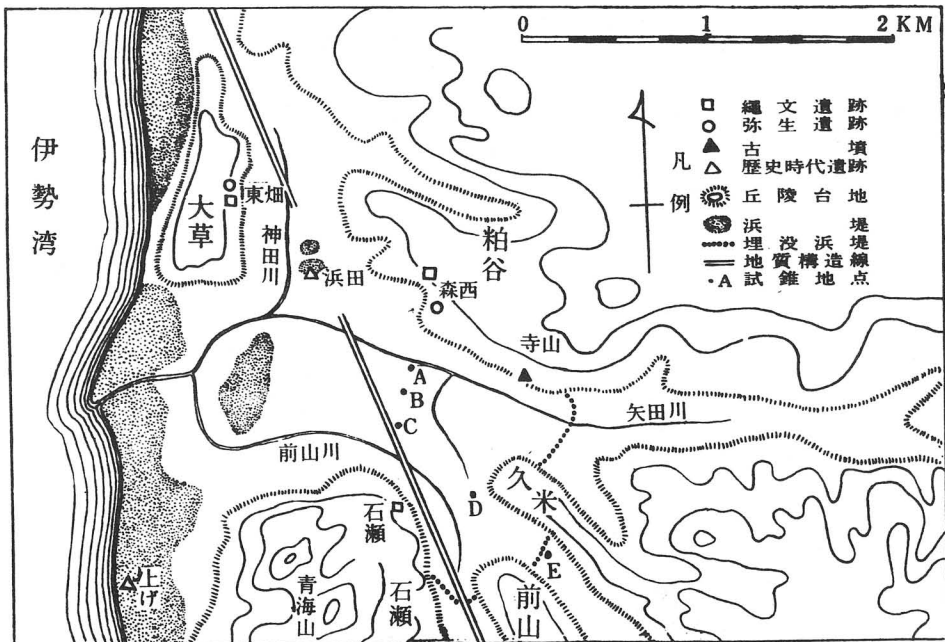
大野谷は出口の部分では大草台地と青海山丘陵とに抱かれたようにせままっているが上記のような構造線の影響もあつて、谷を一步さかのほれば、河谷は十字状にひらけ、かなり広い谷底平地が展開している。このことは、次項でのべる海進期において、出口のせまい袋状の入江をなしていたことを物語るのである。

## (2) 海進期における大野谷地形

大野谷において発見されている遺跡の中で、最も古いものは縄文文化前期(註1)の知多町南粕谷森西貝塚であり、台地の縁辺に貝塚が形成されていて、すでにこのころ大野谷が海進状態にあつたことを示している。この海進はひきつづき縄文文化中期の石瀬貝塚の時期(註2)まで継続しているが、濃尾平野においても、この時期には現海岸線から20kmあまり奥に美濃国庭田貝塚(縄文中期)があるなど、日本各地に当時の海進現象を立証する遺跡が認められる。なお、このような海進現象は、ヨーロッパにおけるLitorina海進と時間的にも、また規模の点からも符合することが注意される。

海進期にあつて、大野谷に海水が侵入した範囲は、当時の入江内に堆積した海成粗砂層の分布によつて、そのおおよそを知ることができる。そこで、ハンドオーガーならびに検土杖によつて海成粗砂層の分布を追跡した結果、まず大草台地と粕谷台地をへだてる構造線に沿う谷は、その北方につづく知多町新舞子から日長の地域まで、完全に海底となつていたことを示していて、海進の最盛時である縄文前期から中期にかけて、大草台地は離れ島となつていたことがうかがわれた。

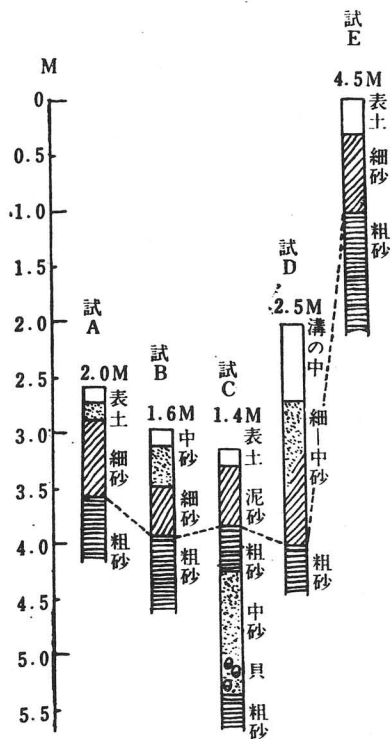
一方、谷の奥に向つての海進の限界は、次に示すような地形的証拠から、現在の4~5m等高線付近にあつたことが推定される。すなわち、大野谷の下流部から上流へ向つ



挿図第十九 大野谷の地形図

森西(縄文前期・弥生後期)、石瀬(縄文中期)、東畑(縄文後晩期・弥生中期)  
寺山(後期古墳)、浜田・上ヶ(奈良時代)

(A・B・C・D・E地点試錐資料は挿図第二十別掲)



挿図第二十 試錐地点地質柱状図  
(各資料頭部の数字は試錐地点の地表面標高を示す)

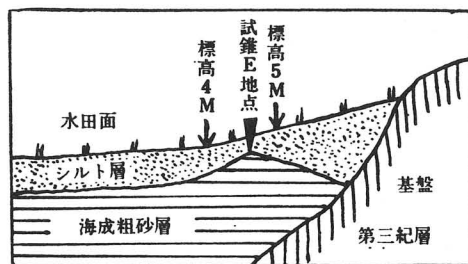
認めることができた。

上記のごとき海成粗砂層の微高地と、その背後にある厚い湿地性堆積層（黝黒色のシルト層）の存在は、ひとり大野谷だけにみられる地形ではなく、さきに筆者等が報告（註3）した南知多町の片名谷にもその典型をみることができた。もつとも、片名谷の場合は、この微高地が礫質であり、かつ現在の谷表面（水田面）から1m余の比高をもつて地上に姿をあらわしている点、それが粗砂からなり水田面下に埋没している大野谷の場合とやや異なるが、背後に深い湿地性堆積層をもつことからみても、酷似した地形現象といえることができる。そこで、地形観察のより容易な片名谷の微高地について、その成因を検討してみると、それはあきらかに、海進時の入江の奥部に形成された礫嘴状の浜堤と解することができるのである。このような解釈を大野谷にあてはめてみるならば、同谷の海進時における海水の侵入限界、換言すれば入江の最深部は、ほぼこのような旧浜堤の個所あたりであつたらうことが推定されるのである。

なお、大野谷の旧浜堤が粗砂からなり、高度も片名谷ほど顕著でないのは、後者が外海の激しい波浪の影響を受けやすい位置にあるラツパ状の入江であるのに対

て試錐調査を実施した結果、森西・石瀬貝塚間の谷底（試錐点A・B・C）においては地表面から70～100cmにおいて海成粗砂層に達したがそれから500mほど上流の地点（試錐点D・久米台地先端から西へ約200m）では、同層面の深さが約200cmになっている。これは粗砂層面がほぼ水平であるのたいて、地表面高が上流に向つて漸次高まっている結果であることは挿図第二十からも理解され、このような傾向は久米・前山の両台地間の谷地に入つてもつづいている。しかるに、挿図第二十一の試錐点E付近の資料が示すように4～5m等高線付近になると急に粗砂層面は浅くなり、多少の起伏はあるが1m検土杖によつても同層面に達するような状態を呈する。

このような粗砂層の浅位部、すなわち微高地は、約20mの幅をもつて谷地を横断しているがそれより上流に進むと粗砂層面は急に深くなり有機質を多量に含む黝黒のシルト層が底深く堆積して、深さ2mの試錐の限りでは下の地層を確認することができなかつた。これと同じような現象は、久米台地北側の矢田へ通ずる谷でもまた南の前山・石瀬の両台地間にある谷地でも



挿図第二十一  
試錐地点E付近の地表下層序の模式図



して、前者はおだやかな袋状の入江のなかであつたという形成環境の違いにもとづくものと思われる。

### (3) 石瀬貝塚の生活環境

石瀬貝塚が立地している所は、東と北に向つて開けた標高約10mの段丘面にあり、地質は新第三紀に属する尾張夾炭層（常滑頁岩ともいう）の上を、うすくおつた第四紀洪積世の熱田層が基盤となつている。この地域の熱田層は、より高位にあつたいわゆる猪高層が崩壊して二次的に堆積したものと考えられ、硅岩質の礫を多くふくんでいる。

台地の下には現在この付近の部落にひろく供給している簡易水道の水源井戸があるが遺跡の人人の飲料水としてはあながち台地の下に頼らなくても、段丘面に浅く硬質粘土層を主とする尾張夾炭層があるため、遺跡の近くにも所々に湧水がみとめられる。

海進期の最盛期にあたる石瀬貝塚の周辺景観に目を移すと、北方に島となつている大草台地をのぞみ、東北方1km余の所にはかつて縄文文化前期に森西貝塚が栄えた粕谷台地と入江をはさんで相対している。当時の海は、谷の奥では久米・前山・石瀬をむすぶ現在の標高4～5mの付近までおよんでいたらしく、そのあたりに海進期の頂点の海岸汀線を示す浜堤がみとめられており、海水のおよばない浜堤の奥は泥深い低湿地となつていたことがみとめられる。また背後の丘陵は60mという知多半島中部では最高級の高度ももつ青海山の森林につづいている。

貝層より検出した獣骨は鹿と猪がほとんどすべてである。汀線をなす浜堤の奥に展開される石瀬・前山・久米の各台地間の湿沢地付近の森林は猪の好んで棲息する環境であり、生活の多くが猪狩にさかれていたものと考えられる次第である。さらに鹿はまた毛皮や骨角・肉において猪のおよばない優秀性をもつために、狩猟の対象としてよこばれたものであり、猪とちがつてやや高燥な深林を好むことから、遺跡背後の青海山丘陵を主として猟場と推定するのであるが、丘陵斜面を横切りながら時には勇壮な鹿狩に興じていたものと考えられる。

一方、海産物の面をみると、貝類ではハイガイ・マガキが圧倒的に多くみとめられているが、遺跡の北方約200mの沖積地（試錐点C）を試錐した際にも表土下70cmで海成粗砂層にうつり、海成層をさらに試錐すると表土から220cm付近で多量のハイガイを検出した（挿図第二十）。この事実をみても遺跡近辺がハイガイの繁殖に適したことをうかがうのである。マガキについては現在も大野谷近海の特産として知られている。そして魚類は大部分が砂泥性の海底をもつ沿岸近くでとれる魚類であるが、一部には少々沖合にでないと採捕できない例もみうけられている。

### (4) 海退期における大野谷の地形変化

石瀬貝塚で代表される海進の最盛期にあたり、大草台地が離れ島となつていたことはさきに指摘したのであるが、縄文文化後期の初頭になると大草台地にも集落がいとなまれ、大草台地が陸つづきになつたことを示している。台地の内側で神田川の谷に向つて立地し、縄文文化後期初頭から晩期にいたる東畑貝塚がこれである。台地の裾は遺跡のある地点でなお海水につかっているのであるが、大草台地に集落がみとめられてきたということは、すでに海面の下降がはじまつてをり、大草台地と東の丘陵が陸つづきになつたことを意味するものであろう。貝塚をつくり漁撈生活を主としているとはいえ、狩猟に大きく依存している縄文文化人にとっては、狩猟の対象となる獣類の棲んでいない

ような離れ島に集落をえらぶことは著るしく困難であつたからである。こうした理由から加曾利E式直後を上限とする東畑貝塚の時期（註4）は大野谷における海退運動の指標とされるものである。

海退が進み、知多半島における他の侵蝕谷ではすでにほとんど陸化している時期になつても、大野谷の場合は堆積がはかどらず長い年月にわたり潟状を呈していたものと考えられている。大草・粕谷の両台地にはさまれた神田川の谷の出口に、海退の一時期を示す小規模な浜堤がみられるが、そこに立地する浜田遺跡は奈良時代から平安時代初期に比定され、古代製塩器具とみなされる角形脚台付土器の海浜集落であり、その時期に海岸線がいまだこの遺跡付近で停滞していたことを物語っている。

大野谷の地形が袋形に奥広く発達していて比較的湾口部がせまいことや、その湾口部をふさぐ砂州状の浜堤地形が海退期の海水位に対応してさらに新しく形成されたなどの理由で、谷の内部へ堆積物の供給が不充分となり、陸化がおくれ長くラグーン状を呈している結果となつたものである。

こうした事情は弥生文化のころになつても継続され、大野谷の主谷は米作農業のための水田となりえず、大野谷の弥生遺跡はわずかに主谷をきざんでいる支谷の頭部で、湧水のみとめられるような地点をえらんで小規模の足跡がみられるにすぎない。東畑貝塚・森西貝塚の縄文遺跡と複合して発見される、獅子懸式から寄道式にいたる弥生文化中・後期の遺跡がこれである。

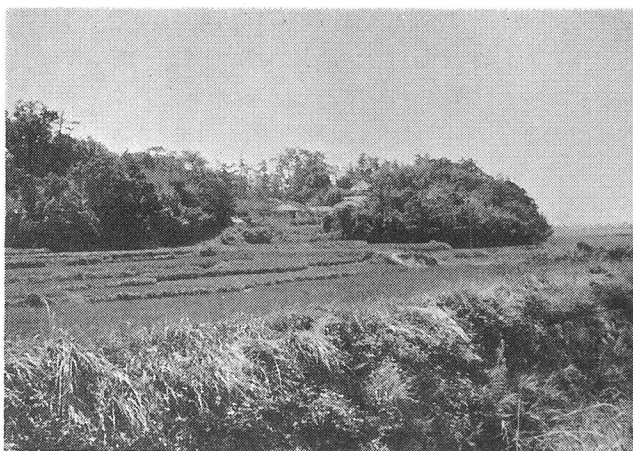
#### 註

1. 千葉県加茂遺蹟の独木舟の測定から $5,100 \pm 400$ 年前という年代が与えられている。（ミシガン大学クレイ博士による）
2. 土器型式からはほぼ同年代と考えられる千葉県姥山貝塚の木炭を測定して  $4,546 \pm 220$ 年前という年代が与えられている。（シカゴ大学リビー博士による）
3. 井関・杉崎「咲畑貝塚の先史地理的考察」（磯部幸男編『咲畑貝塚』所収1960年・愛知県知多郡師崎中学校刊）
4. 久永春男「咲畑貝塚の縄文式土器」（前掲『咲畑貝塚』所収）

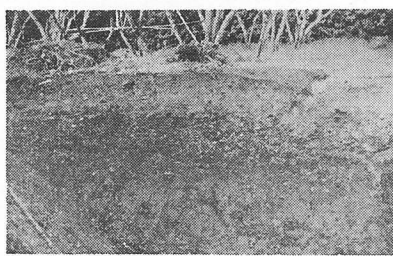
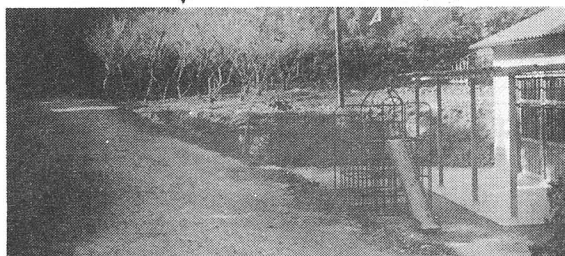
（井関弘太郎）  
（杉崎章）

図版 一

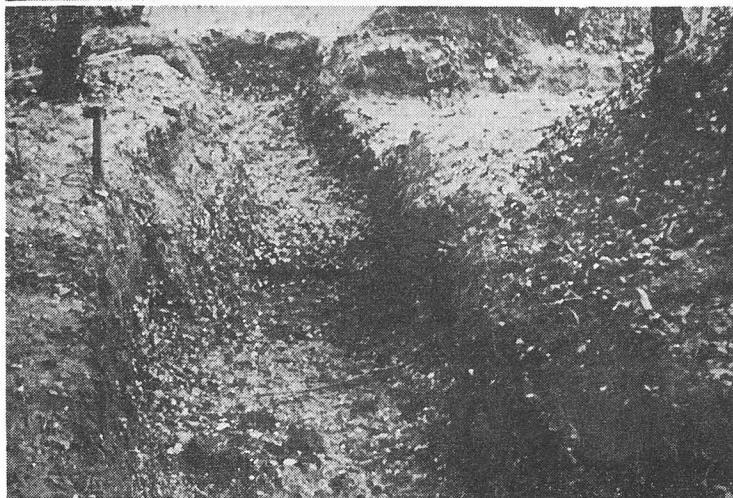
石瀬貝塚の立地→  
中央のきりひらか  
れた台地が貝塚と  
なっている



梅林と電柱のある畑が  
貝塚となっている



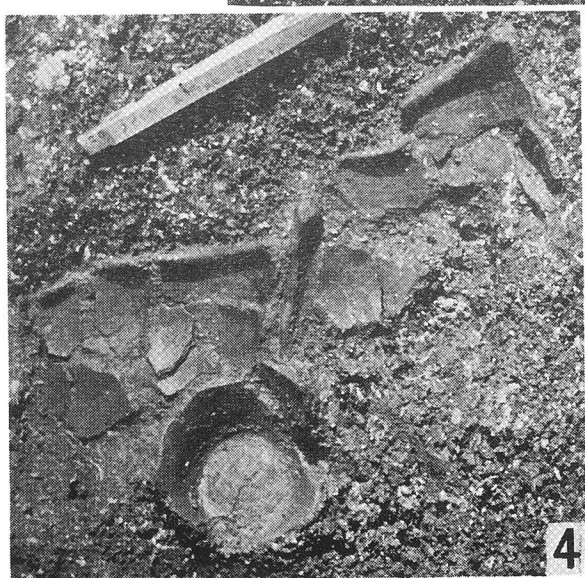
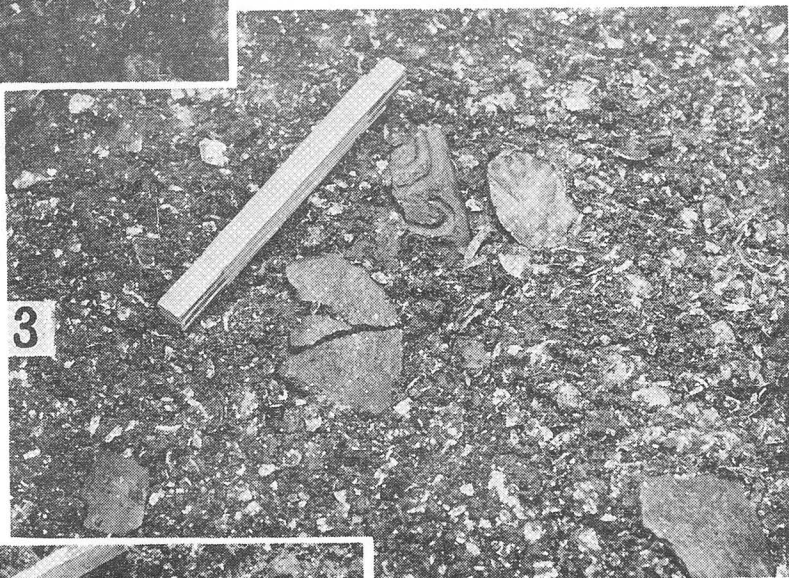
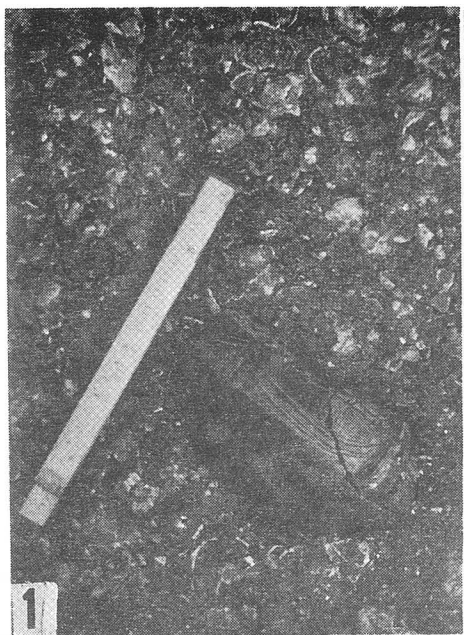
↑  
母子寮建築工事のため  
に土取工事によつて  
あらわれた貝塚の  
断面



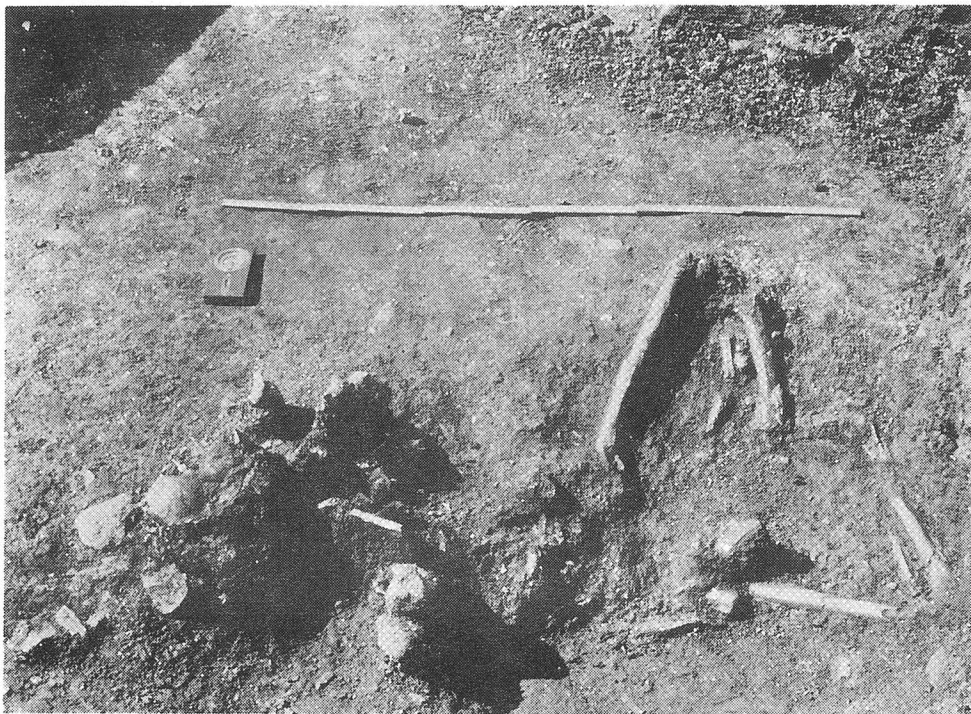
↑  
第1トレンチ平面

第3トレンチ拡張区 →  
東壁断面  
下層低部より人骨  
が検出された





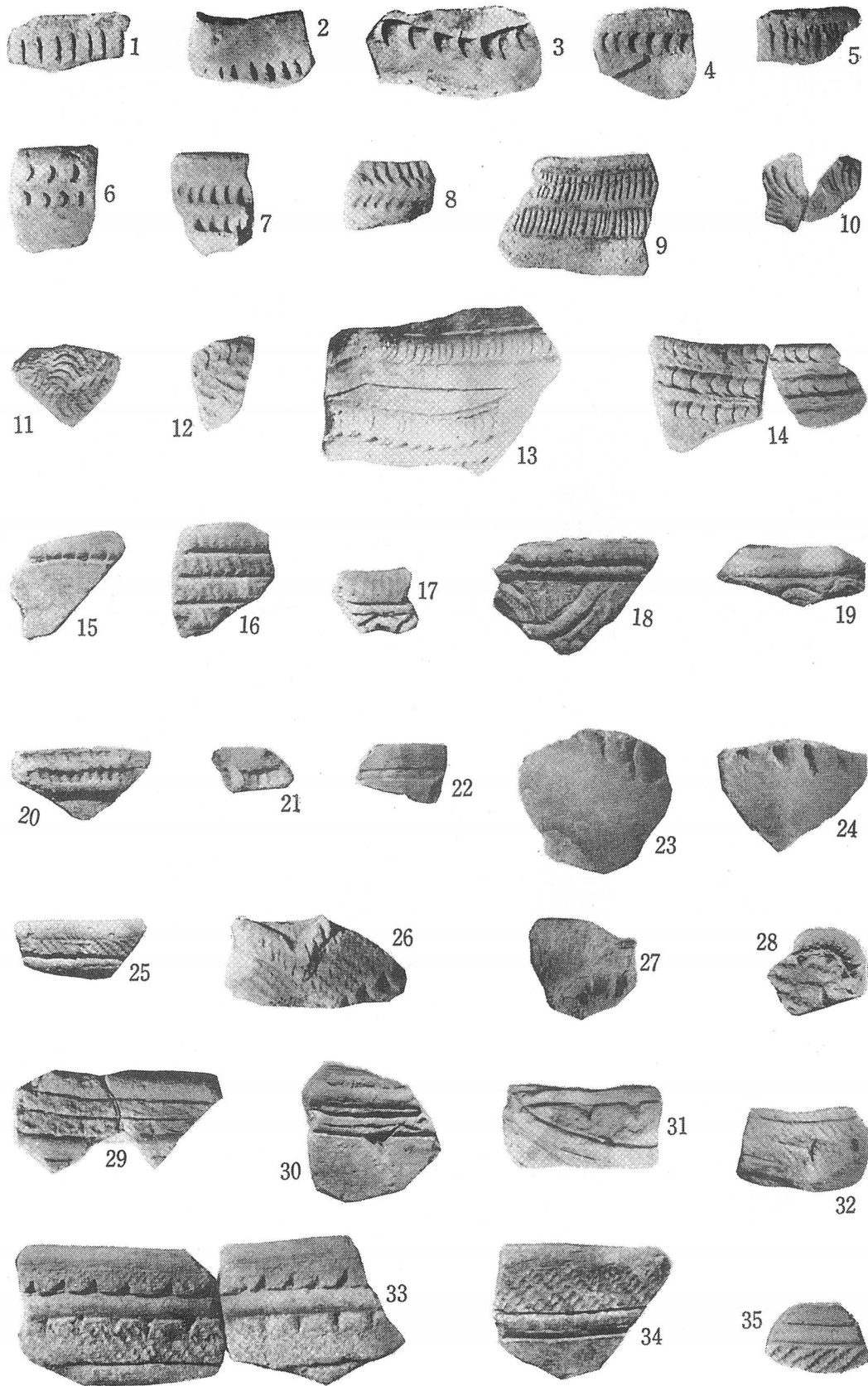
1. 第1トレンチ土器出土状況
2. 第2トレンチの土器出土状況
3. 番3トレンチの土器出土状況
4. 第3トレンチ拡張区の土器出土状況



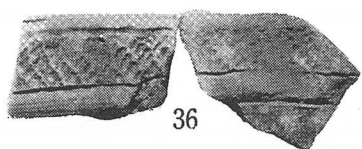
1. 人骨の埋葬状態 (第3トレンチ拡張区)



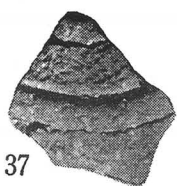
2. 石 鏃



图版五 第一群土器



36



37



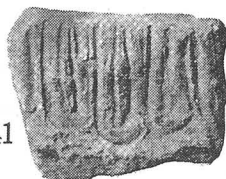
38



39



40



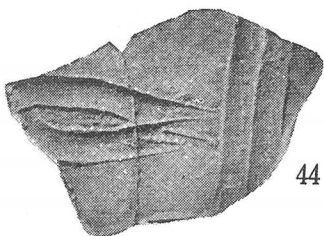
41



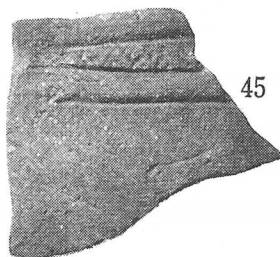
42



43



44



45



46



47



48



49



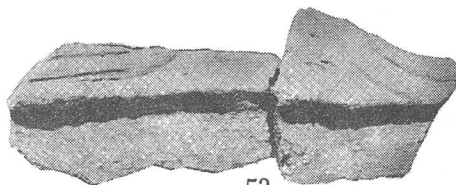
50



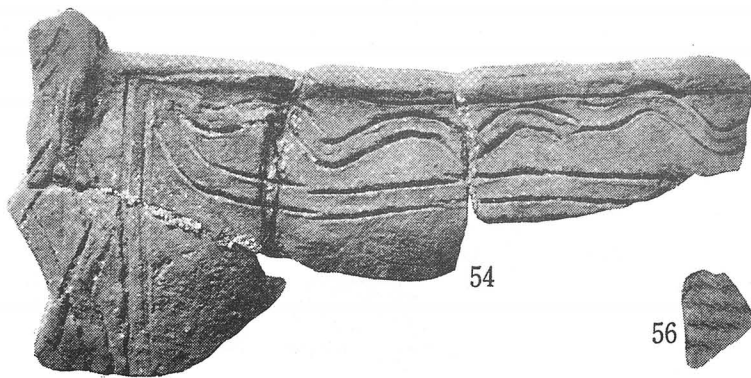
51



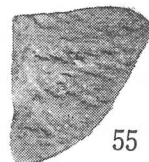
52



53



54



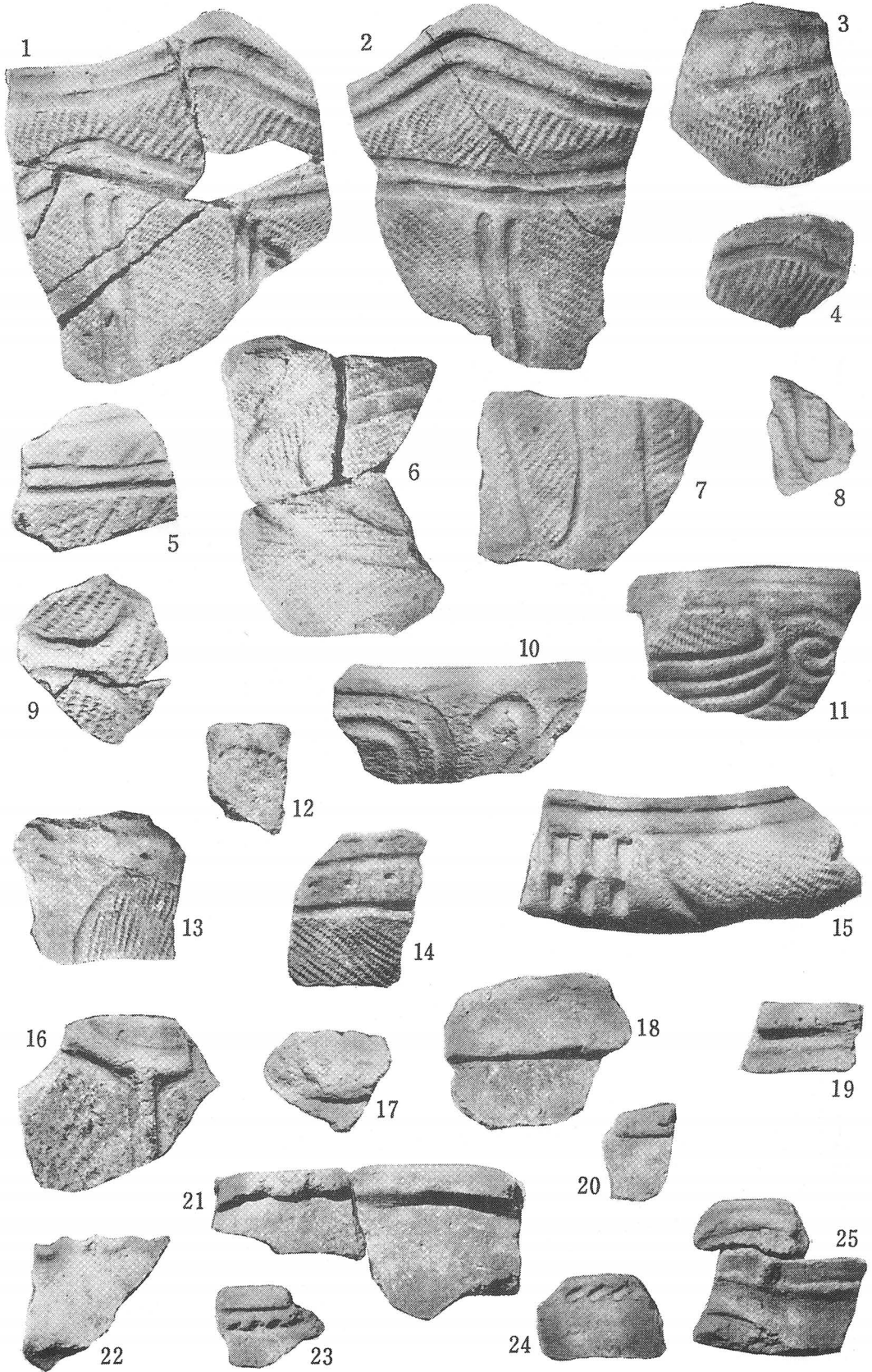
55



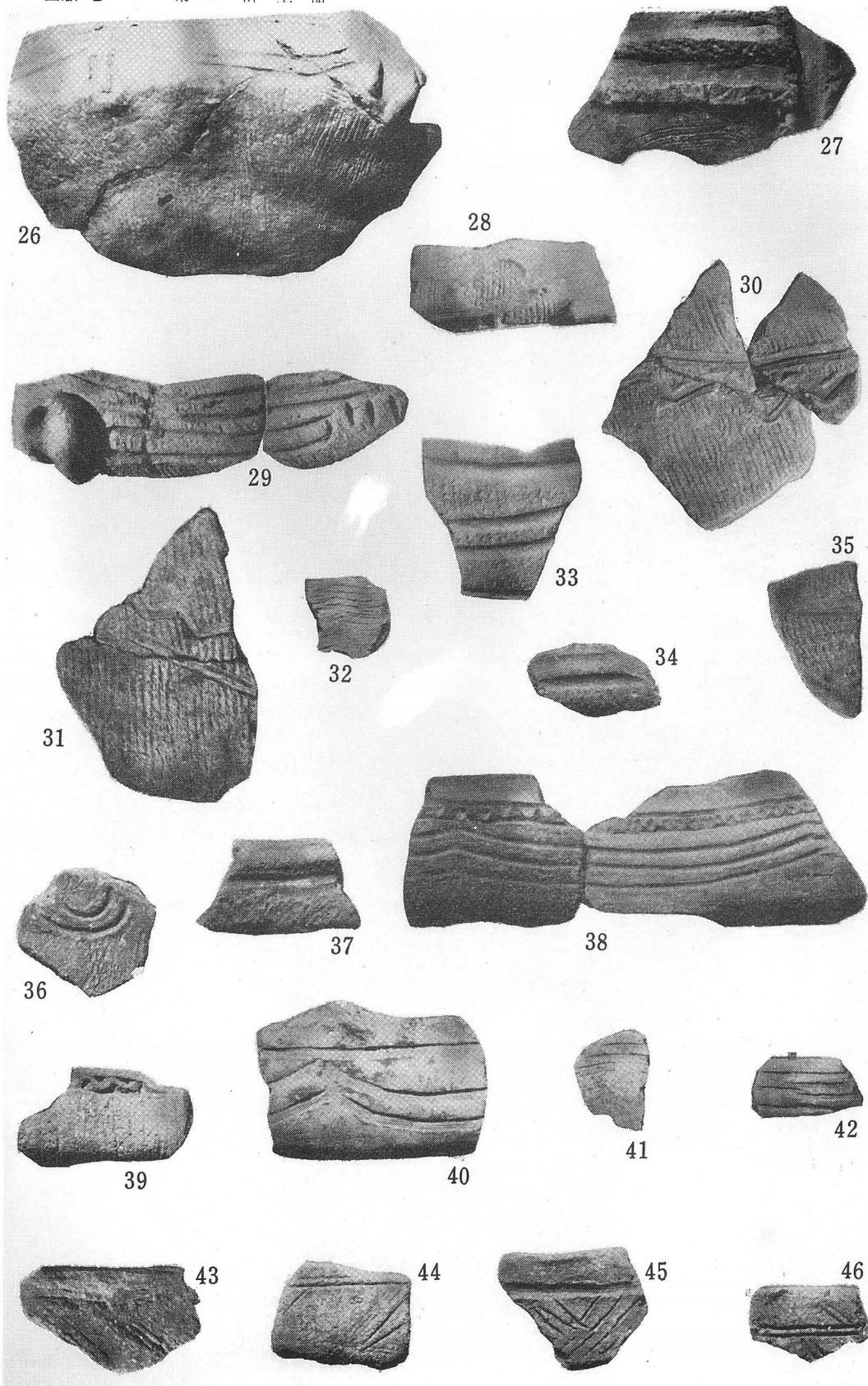
56

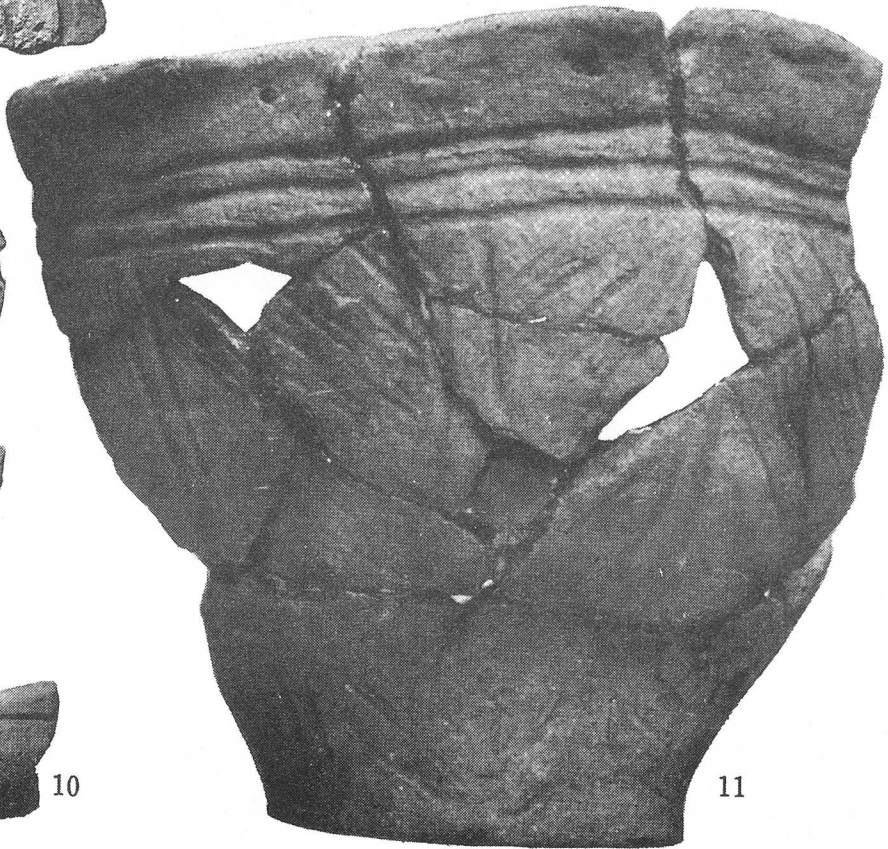
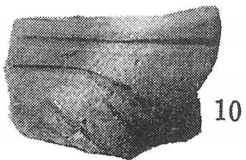
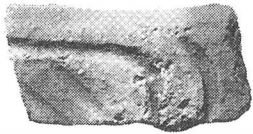
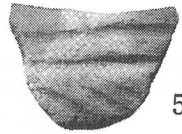
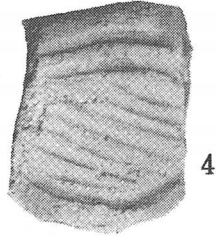
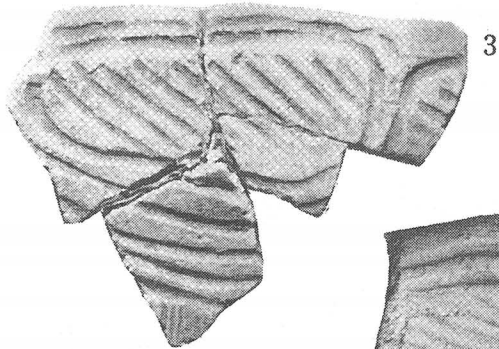
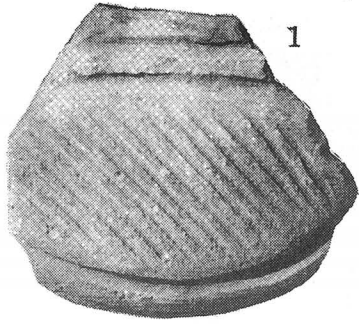


57

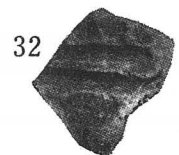
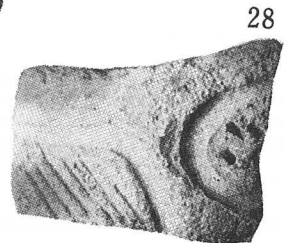
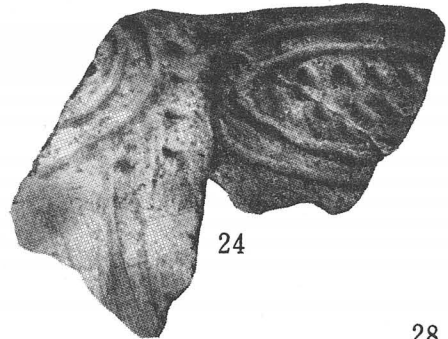
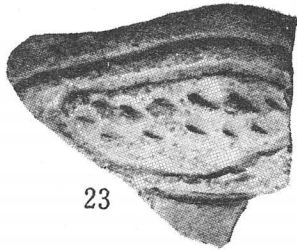
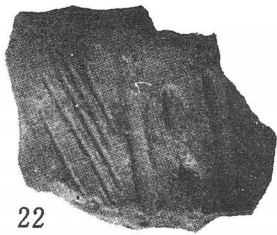
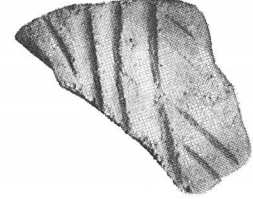
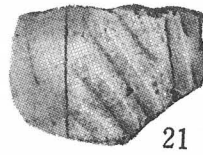
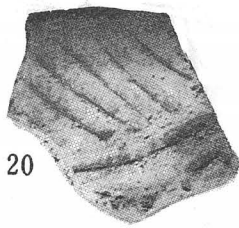
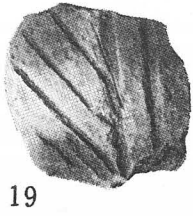
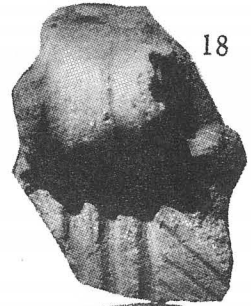
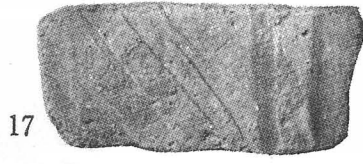
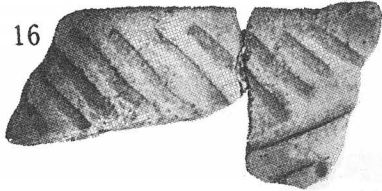
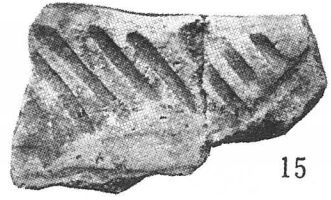
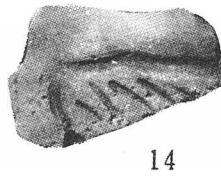
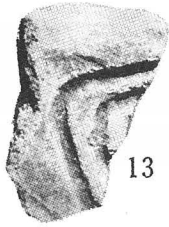


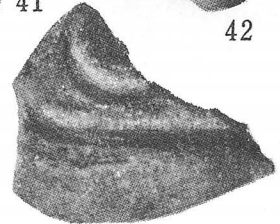
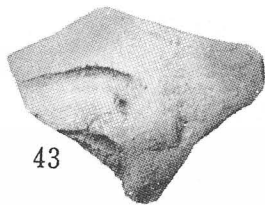
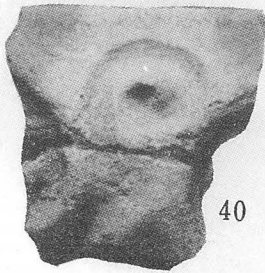
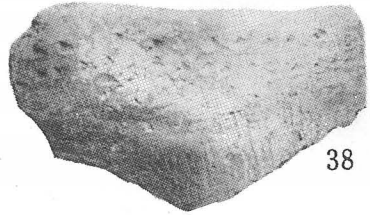
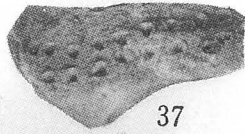
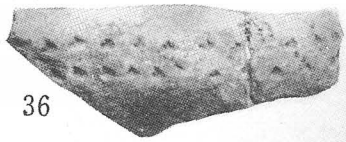
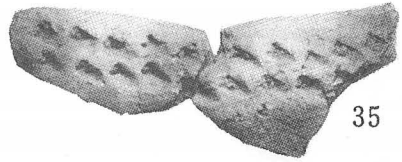
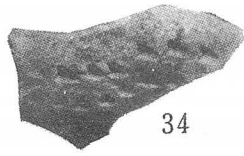
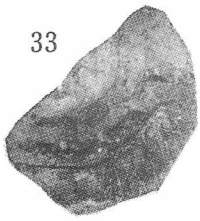




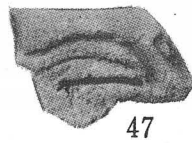
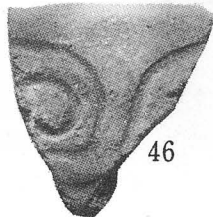


图版九 第三群土器

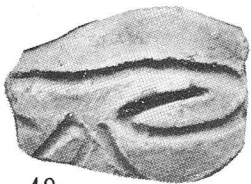




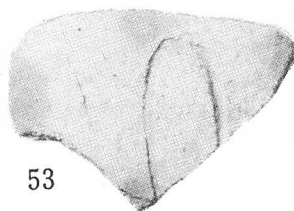
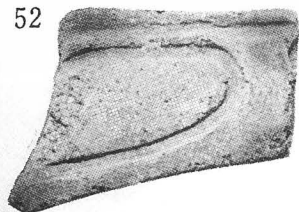
43



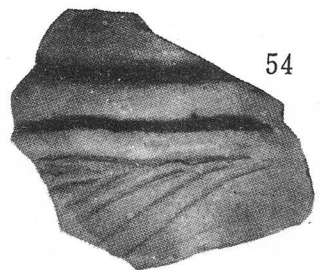
48

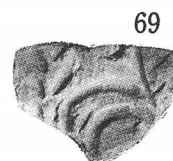
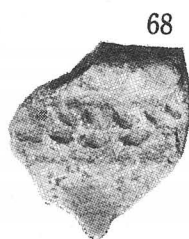
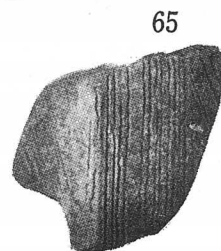
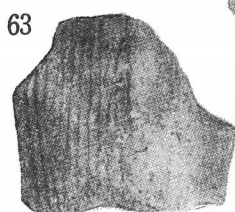
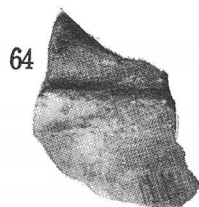
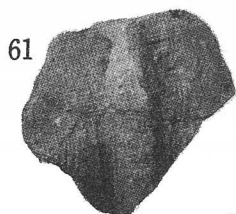
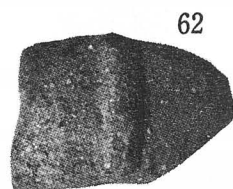
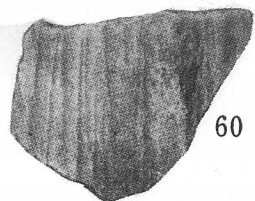
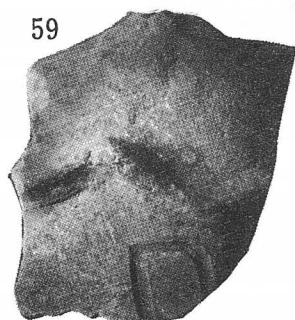
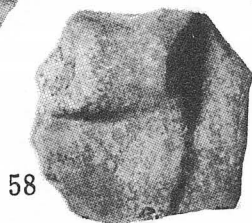


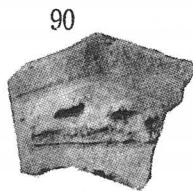
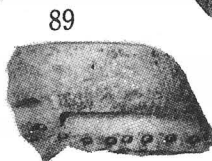
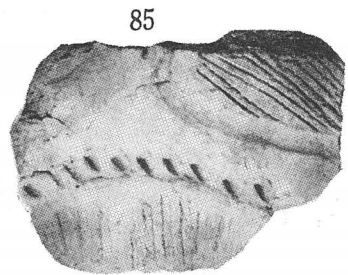
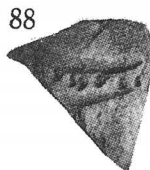
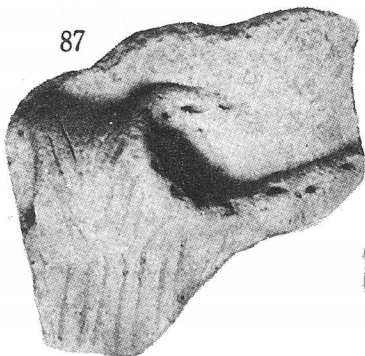
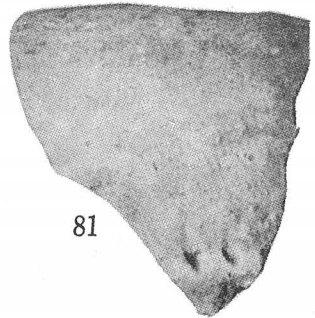
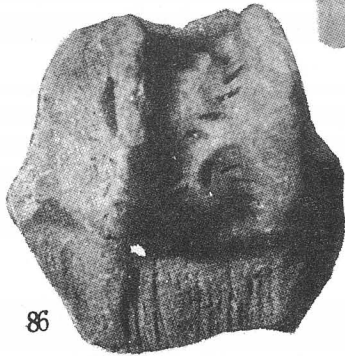
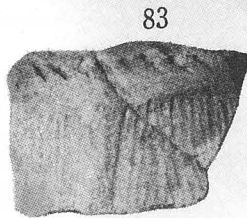
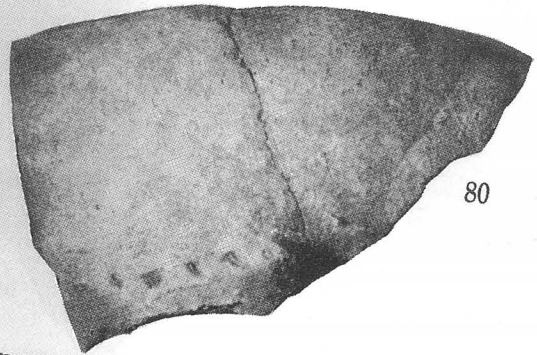
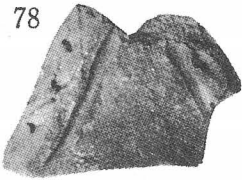
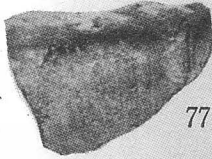
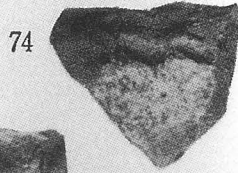
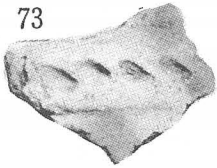
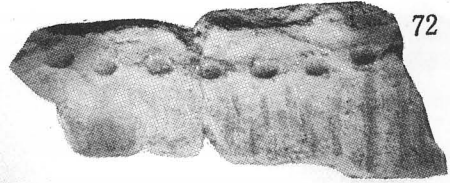
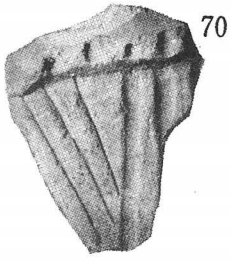
52

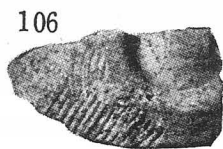
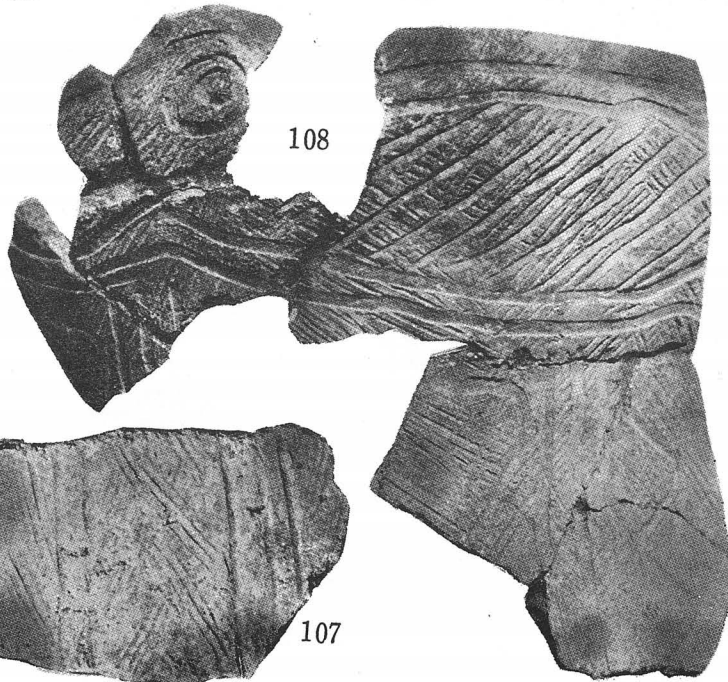
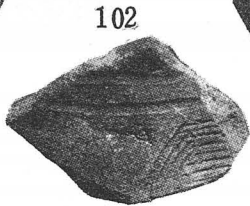
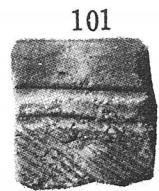
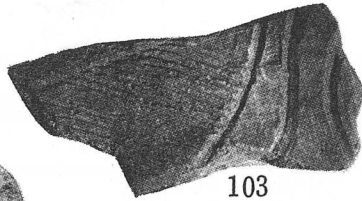
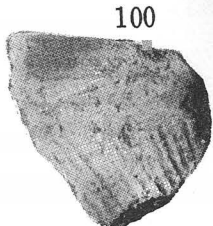
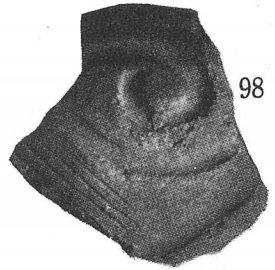
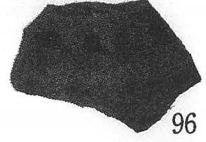
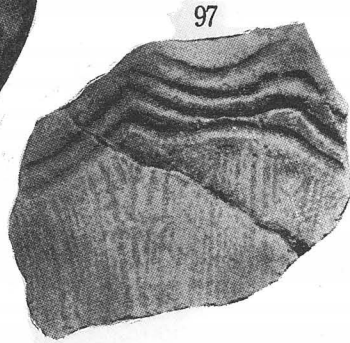
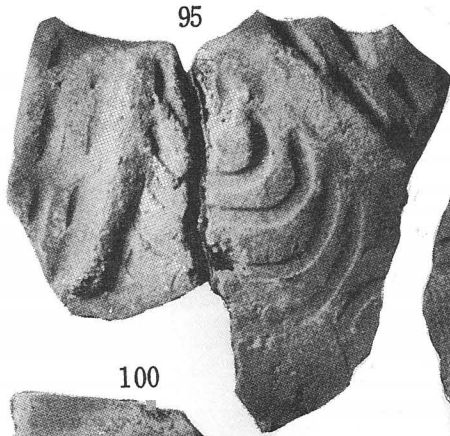
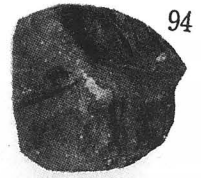
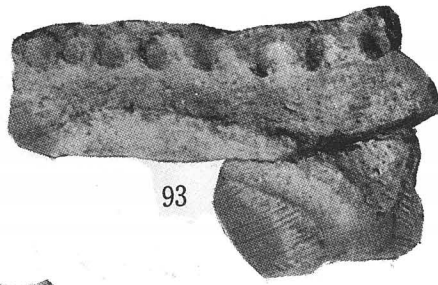
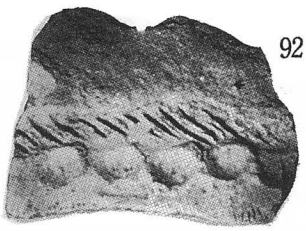


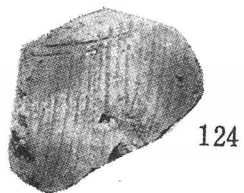
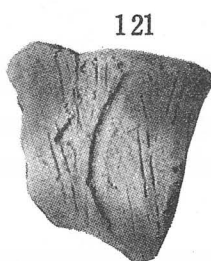
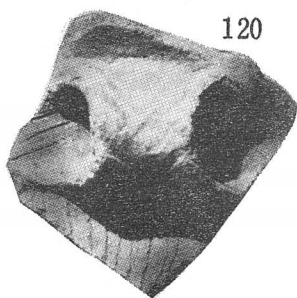
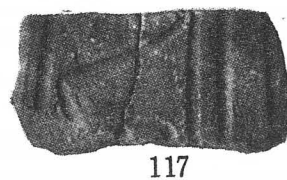
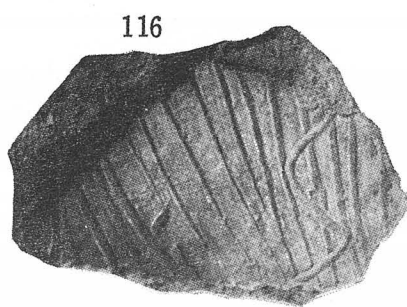
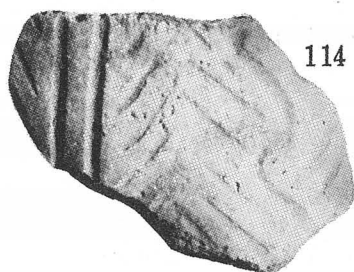
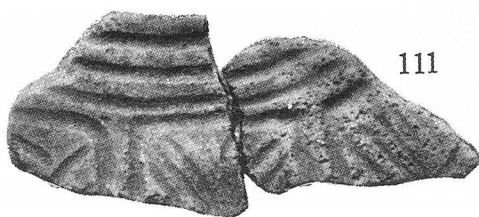
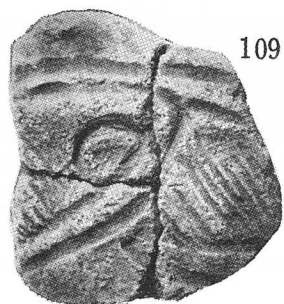
54













平成10年3月31日印刷

昭和37年3月31日発行

## 石 瀬 貝 塚

編集兼  
発行者 常滑市教育委員会

発行所 常滑市教育委員会  
愛知県常滑市

